

出土遺物 土製の壺(628)が出土している。断面無花果形、平面正円形をなし、精良な胎土で、全体的に丁寧につくられている。最大径3.30cm、高さ3.30cmと小型の製品である。頂部は台形錐状をなし、径5mm～7.5mmの紐穴が貫通している。頂部の幅は1.30cmである。頂部を除く全面に沈線が描かれている。明確な規則性は認められない。重量は27.96gである。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.19地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.20地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の壺(629)と甕(630)が出土している。壺は体部中位以下が残存し、体部は球形に近いものと考えられる。底部は回転ヘラナデの後高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。体部外面下半部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。甕は肩部から口縁部にかけて残存する。体部外面はカキ目により、口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられている。体部内面には當て具痕が認められる。

時 期 629は壺Lの下半と考えられることから、南構Ⅷ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.20地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.19地点の南東側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の壺(631)が出土している。口縁部のみの残存で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.21地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.18地点の南東側に位置する(第321図)。

出土遺物 土師器の椀(632)が出土している。椀Caに分類され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時 期 出土遺物から南構Ⅷ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.22地点(図版24 写真図版148 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No.16地点の南東側、No.23地点の南西側に位置する(第325図)。

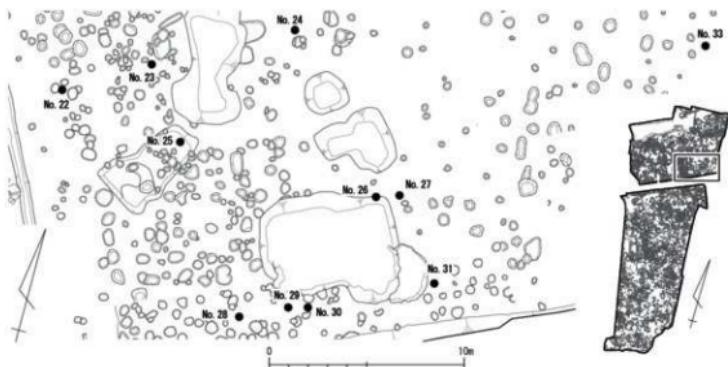
出土遺物 緑釉陶器の椀(633)が出土している。椀d2に分類され、内湾気味に立ち上がる体部に対して口縁部が短く外反している。高台は底部と合わせて回転ヘラ削りにより削り出され、輪高台をなしている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、底部外面を除き施釉が認められる。焼成は硬陶である。

時 期 出土遺物から南構Ⅸ～Ⅹ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.23地点(図版24 写真図版50・90 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No.22地点の北東側、No.25地点の北西側に位置する(第325図)。634が単独で出土している。比較的形が保たれた状態での出土状況である。

出土遺物 土師器の椀(634)が出土している。椀Ad4に分類され、底部は回転ヘラ切りにより切り離さ



第325図 No.22地点～No.31地点・No.33地点位置図

れ、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ－2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.24地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No.23地点の北東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器の榤(635)が出土している。榤Ad4に分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。他は回転ナデを基調としているが、体部下半外面はナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ－2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.25地点(図版24 写真図版90 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.23地点の南東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器の壺(636)が出土している。底部は平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。体部は直線的に立ち上がり、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部と体部の境外面の一部は横ナデにより仕上げられている。底部外面には、外縁部に指腹で押えた圧痕3箇所と、ヘラ記号が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ～Ⅵ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.26地点(図版24 写真図版50 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.27地点の西側に位置する(第325図)。土師器の杯が比較的形が保たれた状態で出土している。

出土遺物 土師器の杯A(637)が出土している。杯Ad4に分類される。平底の底部に対して、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。全体的に器壁が厚く仕上げられている。内外面とも回転ナデを基調とし、底部はヘラ切り後ナデにより仕上げられている。体部下端外面にはヘラナデが認められる。内外面には赤彩が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ－2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.27地点(図版24 写真図版50・90 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.26地点の東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器の把手(638)が出土している。甕の把手と考えられる。指ナデを基調とし、体部との接合部付近はハケにより仕上げられている。体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.28地点(図版24 写真図版90 附表47)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.29地点の南西側に位置する(第325図)。土師器がほぼ完形に近い状態で単独で出土している。

出土遺物 土師器の杯A(639)が出土している。杯Aa1に分類される。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、周囲は静止ヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、外端部を中心とした回転ナデにより内傾する端面が認められる。外面には赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.29地点(図版24 写真図版50・91 附表47)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.28地点の北東側、No.30地点の西側に位置する(第325図)。640がほぼ完形に近い状態で単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯A(640)が出土している。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.30地点(図版24 附表48)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.29地点の東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 怀Aが1個体(642)出土している。杯Adに分類される。底部から体部にかけて残存し、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

須恵器 梶Bが1個体(641)出土している。梶Baに分類される。高台は全体的に丸味を帯び退化傾向にあり、その外側ラインの延長上が体部となっている。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、その後回転ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VII期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.31地点(図版24 写真図版50・91 附表48)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.27地点の南東側に位置する(第325図)。643の1個体が逆位の状態で出土している。643を確認した時点では底部を確認できなかったが、その後接合する底部片を確認した。このため、当初は完存した状態で置かれていたものと考えられる。

出土遺物 土師器の梶(643)が出土している。梶Caに分類される。底部は回転糸切りにより切り離され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。外面の引き上げ痕が顕著である。外面には赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.32地点(図版24 写真図版81・91 附表48・98)

検出状況 北地区北東部、No.33地点の北側に位置する(第320図)。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯A(644)・杯(645)・皿(647)・壺(646)の各器種が出土している。杯Aの644は底部から口縁部にかけて残存するが、内外面とも摩滅のため調整は観察できない。645は杯Aeに分類される。回転ナデを基調としているが、体部下半外面はナデにより仕上げられている。皿の647は口縁部のみ残存する小片である。底部付近外面にヘラ削りの痕跡がわずかに観察できる。内外面には赤彩が認められる。壺の646は口縁部のみの残存で、内外面とも横ナデにより仕上げられている。

須恵器 杯B(648)と壺(649・650)が出土している。杯Bは底部を静止ヘラ削り後高台が貼り付けられ、最後に回転ナデにより仕上げられている。

壺は649と650の2点出土している。いずれも口頭部のみの残存である。649は壺Lの口縁部と考えられる。焼成状況・胎土の特徴から陶邑産の可能性が考えられる。650も壺Lの口縁部と考えられる。

土製品 土錐が2点(651・652)出土している。いずれも環状土錐で、中央部に最大径を有する。2点とも手づくねにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.33地点(図版24・25 写真図版81・91 附表48・98)

検出状況 北地区南東部に位置する(第320図)。No.27地点の北東側に位置する(第325図)。比較的小片となった土器が一箇所に集中した状態で出土している(第326図)。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土器 鉢・壺・鍋が出土している。

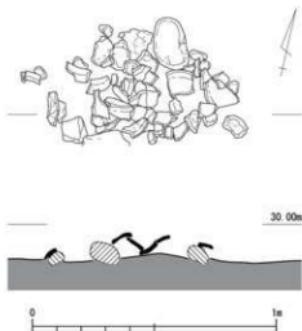
鉢は653の1個体が出土している。鉢Dに分類され、体部から口縁部にかけて内済気味に立ち上がる。体部下半外面を横方向のヘラナデ以外、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内外面が赤色に発色している。

壺は4個体(654~657)出土しているが、いずれも口縁部を中心に残存し、655が壺Fbに、他が壺Ecに分類される。口縁部は外反気味に屈曲し、端部が上方へつまみ上げられている。体部内面は横方向のヘラ削り、外面は縱方向を主体としたハケ、口縁部内面は横方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。ただし657については、口縁部内面が横方向のハケにより仕上げられている。また、657の頭部外面には弱い沈線が施されている。

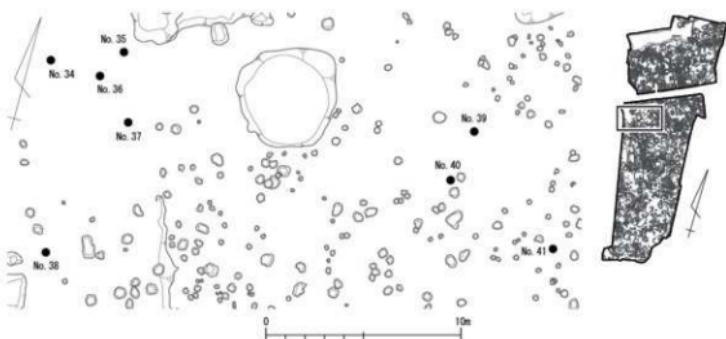
鍋は659の1個体が出土している。鍋Baに分類され、口縁部を中心へ残存する。外面は縱方向、内面は横方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。また体部内面にはハケの後、横方向のヘラ削りが部分的に施されている。

土製品 土錐が1点(658)出土している。完存する個体で、ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第326図 No.33地点土器出土状況



第327図 No.34地点～No.41地点位置図

No.34地点(図版25 写真図版50・92 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.35地点の南西側、No.36地点の西側に位置する(第327図)。横瓶と長頭壺が単独で出土しており、その出土状況からその場で押し潰されたものと考えられる。なお当地点が南構10号墳第1石室開口部の南側にあたることから、当該石室に伴う遺物の可能性が考えられる(後述: 第4章第11節)。

出土遺物 須恵器の壺が2点(660・661)出土している。

660は横瓶である。ほぼ全体が残存する個体で、体部は叩き整形後カキ目により仕上げられている。内面には当て具痕が認められるが、部分的にナデが加えられている。最後に口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。最大径部には円盤充填痕が認められる(第328図)。

661は広口長頭壺の一部と考えられる。頭部下端から体部下半にかけて残存する。内外面とも回転ナデを基調とし、頭部と体部下半外面にはカキ目が加えられている。体部中位外面には2条の凹線が引かれ、その間に刻み目がされ、最後にカキ目により仕上げられている。



第328図 660内面充填痕

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.35地点(図版25 写真図版92 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.34地点・No.36地点の北東側に位置する(第327図)。杯蓋と杯がセットで出土している(第329図)。No.34地点同様、当地点が南構10号墳第1石室開口部の南側にあたることから、当該石室に伴う遺物の可能性が考えられる(後述: 第4章第11節)。

出土遺物 須恵器の杯蓋3個体(662～664)と杯1個体(665)・高杯



第329図 No.35地点土器出土状況

(666)が出土している。杯蓋は、662の天井部1/3が回転ヘラ切り後未調整であるのに対し、663は回転ヘラ削りにより仕上げられている。その範囲は天井部の1/3に限られる。杯は底部が回転ヘラ切り後未調整である。666は、底部付近にわずかに脚部への変換部を確認できたため、高杯と判断したものである。杯部下半は回転ヘラ削りにより仕上げられ、接合部付近は回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.36地点(図版25 写真図版50・92 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.34地点の南東側、No.35地点の南西側、No.37地点の北西側に位置する(第327図)。667の1個体が完存する形で出土している。No.34地点・No.35地点同様、当地点が南構10号墳第1石室開口部の南側にあたることから、当該石室に伴う遺物の可能性が考えられる(後述: 第4章第11節)。

出土遺物 須恵器の杯蓋が1個体(667)出土している。杯蓋mに分類され、天井部の1/2が回転ヘラ削りにより仕上げられている。口径17.15cmを測る大型品である。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.37地点(図版25 写真図版93 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.36地点の南東側に位置する(第327図)。破片が1箇所に集中した状態で出土している。本来は完存していたものが、土圧等で押し潰されたものと考えられる。

出土遺物 須恵器の壺が1個体(668)出土している。広口壺に分類されるもので、完形に復元された個体である。内外面とも回転ナデを基調とし、その後カキ目が施されている。体部下半は回転ヘラ削りにより仕上げられ、その後中位付近に静止ヘラ削りが加えられている。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.38地点(図版25 写真図版51 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.37地点の南西側に位置する(第327図)。669の1個体が底部のみ単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯Bが1個体(669)出土している。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。底面には高台貼り付けの際の爪先の当たりが認められる。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.39地点(図版25 写真図版51・93 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.40地点の北側に位置する(第327図)。完存する個体が単独で出土している。

出土遺物 須恵器の壺Mが1個体(670)出土している。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、その後回転ナデにより仕上げられている。体部から口縁部にかけても回転ナデを基調として仕上げられている。その後体部下半外面は回転ヘラ削りにより仕上げられ、最後にナデが加えられている。体部外面には2条の沈線が認められるが、1条は途中で途切れている。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.40地点(図版25 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.39地点の南側に位置する(第327図)。

出土遺物 須恵器の皿が1個体(671)出土している。皿Acに分類される。口縁部は斜上方に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられているが、底部内面はナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.41地点(図版25 写真図版51・93 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.40地点の南東側に位置する(第327図)。672が比較的小片で出土している。

出土遺物 土師器の皿が1個体(672)出土している。皿Abに分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。口縁部内外面は丁寧な回転ナデにより仕上げられている。内外面に赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.42地点(図版76 写真図版51・186 附表100)

検出状況 南地区北東部(第320図)、No.43地点の南西側に位置する(第330図)。

出土遺物 磨石(S11)が出土している。比較的扁平な自然石を利用した製品で、完存する。1面に磨き痕が認められる。

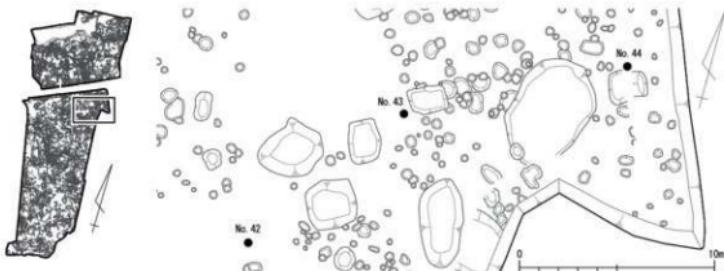
時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。

No.43地点(図版25 写真図版93 附表49)

検出状況 南地区北東部(第320図)、No.44地点の南西側に位置する(第330図)。

出土遺物 土師器の壺(673)が出土している。壺Ecに分類され、体部は球形に近い形態である。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が中位以下を縱方向、肩部付近を横方向のヘラ削り、口縁部を横方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。外面全面に煤の付着が認められるが、特に体部下半の煤の付着が顕著である。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



330図 No.42地点～No.44地点位置図

No.44地点(図版26 写真図版51 附表49)

検出状況 南地区北東部(第320図)、No.43地点の北東側に位置する(第330図)。674の一部が単独で出土している。

出土遺物 土師器の鍋(674)が出土している。鍋Abに分類され、体部から口縁部にかけて残存する。外面は、体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部から口縁部にかけて横方向のハケの後、体部が部分的に横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.45地点(図版26 写真図版93 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.46地点の北側、No.47地点の北西側に位置する(第331図)。

出土遺物 須恵器の壺(675)が出土している。底部から肩部付近まで残存し、壺Lの一部と考えられる。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられている。外面は回転ヘラナデ後回転ナデにより仕上げられ、下半について静止ヘラ削りが加えられている。内面は回転ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第331図 No.45地点～No.52地点位置図

No.46地点(図版26 写真図版93・149 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.45地点の南側、No.47地点の南西側に位置する(第331図)。

出土遺物 土師器と綠釉陶器が出土している。

土師器 托(676)が出土している。底部から体部にかけて残存し、底部は回転条切りにより切り離されている(第332図)。体部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

綠釉陶器 盆(677)が出土している。底部を中心には輪高台をなし、回転ヘラ削りにより削り出されている。他は回転ナデにより仕上げられている。

高台より内側を除き、施釉が認められる。焼成は軟陶である。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第332図 676底部拓影

No.47地点(図版26 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.45地点の南東側、No.46地点の北東側に位置する(第331図)。

出土遺物 土師器の壺(678)が出土している。壺Fcに分類される。体部から口縁部にかけて残存し、体部は半球形をなすものと考えられる。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部から口縁部にかけて横方向のハケの後、体部には部分的なヘラナデが加えられている。最後に口縁部が横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.48地点(図版26 写真図版51・94 附表49)

検出状況 南地区中央部西側に位置する(第320図)。No.49地点の北側に位置する(第331図)。679がほぼ完存に近い状態で単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯(679)が出土している。杯h4に分類される。底部は回転ヘラ切り後ナデが加えられている。底部と体部の境には補助ケズリが認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.49地点(図版26 写真図版51・94 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.48地点の南側に位置する(第331図)。680と681がそれぞれ完存に近い状態で、近接して出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 梗が1個体(681)出土している。梗Ad4に分類され、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。内面は回転ナデにより仕上げられている。外面については摩滅のため観察できないが、回転ナデと考えられる。

須恵器 杯蓋(680)が出土している。杯蓋Y4に分類され、天井部は回転ヘラ切り後未調整である。

時期 680は南構Ⅵ-2期に、681は南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.50地点(図版26 写真図版94 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.49地点の南側に位置する(第331図)。682と683の一部が重なるようにして出土している。比較的小片となった状態での出土状況である。

出土遺物 土師器の壺(682)と甕(683)が出土している。壺は分類される。壺の体部は、外面がハケ、内面が横方向のヘラ削りとハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。甕は底のコーナー部分を中心に残存する。底は焚口部に貼り付けられ、横方向のナデにより仕上げられている。焚口部は、外面がハケ、内面が縱方向のヘラ削りにより仕上げられている。底の幅は6.00cmを測る。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.51地点(図版26 写真図版187 附表100)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.52地点の南側に位置する(第331図)。

出土遺物 磨石が1点(S12)出土している。断面方形をなす紡錘形の自然石を利用したものである。完存する個体で、両端部に使用痕(磨き痕)が認められる。

時期 出土遺物から南構I期に位置付けられる。

No.52地点(図版26 附表49)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.51地点の北側に位置する(第331図)。比較的小片で出土している。

出土遺物 土師器の杯A(684)が出土している。杯は分類され、底部は回転ヘラ切り後丁寧なヘラナデにより仕上げられている。内外面には赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.53地点(図版26 写真図版51 附表49)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.54地点の西側に近接して位置する(第333図)。土器はやや小片となって出土しているが、当初は形のある状態であったものと考えられる。

出土遺物 弥生土器のナデ甕(685)が出土している。体部は、外面が斜方向のハケ、内面がハケの後ヘラ削りにより仕上げられている。最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられ、複合口縁をなしている。

時期 出土遺物から南構III-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.54地点(図版26 写真図版94 附表49)

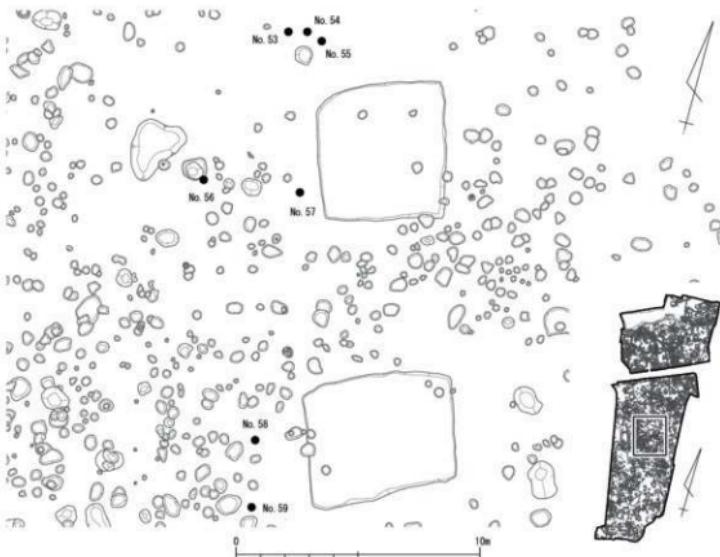
検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.53地点の東側、No.55地点の北西側に近接して位置する(第333図)。686が土圧で押しつぶされた状態で出土している。

出土遺物 弥生土器の鉢(686)と高坏(687)が出土している。

鉢は台付鉢に分類されるもので、口縁部は複合口縁をなす。体部から口縁部にかけては内外面とも丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。台部はナデにより仕上げられている。ヘラミガキにより仕上げられていることから鉢に分類したが、外面に煤の付着が認められるため甕の可能性も考えられる。

高坏は脚裾部が残存する。内外面とも横方向を主体としたハケにより仕上げられ、外面は縦方向のヘラミガキが加えられている。

時期 出土遺物から南構III-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第333図 No.53地点～No.59地点位置図

No.55地点(図版26 写真図版52・94 附表49)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.54地点の南東側に近接して位置する(第333図)。口縁部片が単独で出土している。No.53地点・No.54地点とともに一つの遺構であった可能性が考えられる。

出土遺物 弥生土器のナデ甕に分類される688が出土している。体部は、外縁が横方向のハケ、内縁が横方向のヘラナデにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅲ～Ⅰ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.56地点(図版26 写真図版52・187 附表100)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.57の西側に位置する(第333図)。

出土遺物 砥石が1点(S13)出土している。完存するものではないが、自然石を利用したものである。平坦な1面が利用されている。一部に敲いた痕も認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅳ～VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.57地点(図版26 写真図版52 附表49)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.56地点の東側に位置する(第333図)。

出土遺物 土師器の甕(689)が出土している。甕Fcに分類され、口径34.60cm、最大径35.50cmを測る大型の土器である。体部は、外縁が縦方向のハケ、内縁が横方向の後縦方向のハケにより仕上げられている。口縁部は、内縁が横方向のハケの後、内外面が横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅲ～Ⅰ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.58地点(図版26 附表49)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.59地点の北西側に位置する(第333図)。

出土遺物 須恵器の皿B(690)が出土している。口径25.70cmと復元される大型品である。体部下端外面は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.59地点(図版26 写真図版52 附表49)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.58地点の南東側に位置する(第333図)。691が底部を中心に逆位の状態で、単独で出土している。

出土遺物 須恵器の壺(691)が出土している。底部を中心には存する。底部はナデの後高台が貼り付けられている。底部内面は強い指オサエヒナデにより仕上げられている。体部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより仕上げられている。全体的に雑なつくりである。

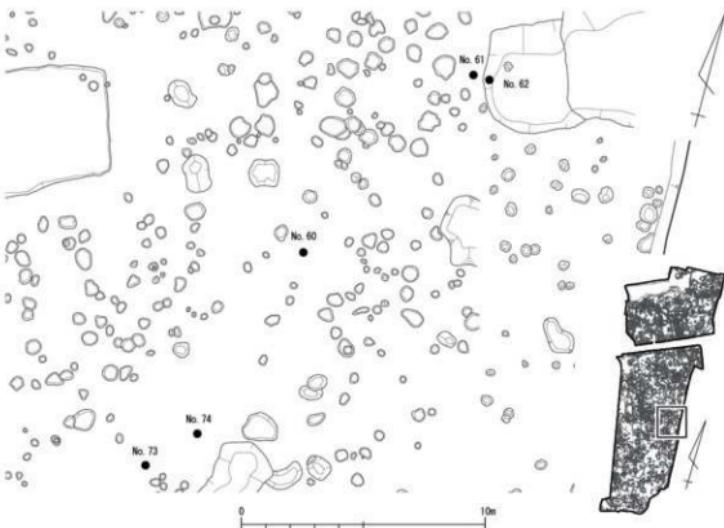
時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.60地点(図版26 写真図版94 附表49)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No.61地点の南西側に位置する(第334図)。土器の残存状況から、当初は完形の状態であったものと考えられる。

出土遺物 須恵器の杯蓋(692)が出土している。ほぼ完存に近い個体で、杯蓋Y6に分類される。天井部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第334図 No.60地点～No.62地点・No.73地点・No.74地点位置図

No61地点(図版26 写真図版94 附表49)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No62地点の西側に近接して位置する(第334図)。

出土遺物 須恵器の杯Bの1個体(694)が出土している。杯Bbに分類される。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反傾向にある。底部は回転ナデの後高台が貼り付けられている。体部外面下端は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No62地点(図版26 写真図版187 附表100)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No61地点の東側に近接して位置する(第334図)。

出土遺物 敲石もしくは台石と考えられるS14が出土している。平面三角形をなす自然石を利用したもので、完存する。平坦面に敲打痕が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。

No63地点(図版27 写真図版52・95 附表49)

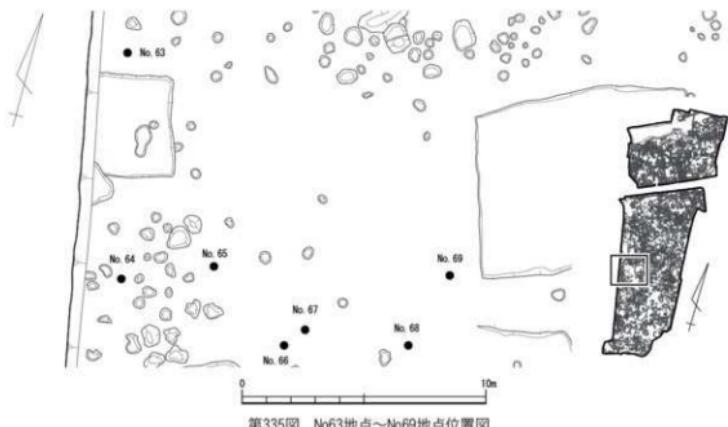
検出状況 南地区中央部西端(第320図)、No64地点の北側に位置する(第335図)。数個体の土器が一箇所に集中して出土しているが、後述するように土器に時期差が認められることから、一括性はないものと考えられる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺と杯Aが出土している。

壺は2個体(698・699)出土している。2個体とも壺Gcに分類され、口縁部は「く」字形をなす。体部は、外面が縱方向のハケ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。また698の口縁部内面には横方向のハケが認められる。

杯Aも2個体(696・697)出土している。696は杯Ad4に分類され、体部から口縁部にかけて直線的で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。一方697



は杯Af4に分類され、部体が内湾傾向にあり、器壁が厚い傾向にある。底部は回転系切りにより切り離されている。底部内外面に凹凸が認められ、全体的に稚拙なつくりである。外面には赤彩が認められる。

須恵器 杯B蓋(700)・杯A(701)・壺(702)が出土している。700は杯B蓋Acに分類され、天井部から口縁部にかけて大きく屈曲している。天井部全体が回転ヘラ削りにより仕上げられ、つまみの剥離痕が認められる。701は杯Akに分類される。器壁全体が厚い傾向にあるとともに、粗い胎土である。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、板目状の圧痕が認められる。702は壺Bの一部と考えられる。底部の切り離しはヘラ起こしによっている。部体外面は、回転ヘラ削りの後回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No64地点(図版27 写真図版52・95 附表49)

検出状況 南地区中央部西端(第320図)、No63地点の南側、No65地点南西側に位置する(第335図)。703がほぼ完形に近い状態で、単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯が1個体(703)出土している。底部の2/3が回転ヘラ削りにより仕上げられ、一部粗いナデが加えられている。口縁端部は丸くおさめられている。器壁が全体的に厚い傾向にある。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No65地点(図版27 写真図版52・95 附表49)

検出状況 南地区中央部西端(第320図)、No64地点の北東側に位置する(第335図)。704が土压で押しつぶされた状態で単独で出土している。

出土遺物 須恵器の高杯が1個体(704)出土している。無蓋高杯Dbに分類され、杯部は杯形をなしていない。脚部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯底部内面には円弧を描くようなナデが認められる。脚部に透かし孔は認められない。杯部を中心に器壁が厚く仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No66地点(図版27 写真図版95 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No67地点の南西側に近接して位置する(第335図)。705が単独で出土している。当初は完存する形であったものと考えられる。

出土遺物 土師器の杯が1個体(705)出土している。杯Cbに分類されるもので、ほぼ完存する。底部は平底をなし、半球形をなす体部に口縁部が短く「く」字形に屈曲している。底部から体部外面は指オサエとナデ、内面は横ナデ後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。最後に内面に放射状に暗文が施されている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No67地点(図版27 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No66地点の北東側に近接して位置する(第335図)。

出土遺物 須恵器の高杯が1個体(706)出土している。脚部が完存する状態で出土している。無蓋高杯Hの脚Dbと考えられる。脚部には透かし孔は認められない。

時 期 出土遺物から南構VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.68地点(図版26・27 写真図版96 附表49・50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.67地点の東側、No.69地点の南側に位置する(第335図)。

出土遺物 土師器の椀が3個体(693・695・707)出土している。693は底部が平底をなす椀で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部の切り離しは観察できない。695は輪高台を有する椀で、底部を中心に残存する。底部は回転糸切り後高台が貼り付けられている。高台高1.30cmと大型の椀である。707は平底をなすが、平高台の痕跡が認められる。回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土遺物から南構区-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.69地点(図版27 写真図版52・96 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.68地点の北側に位置する(第335図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺が1個体(710)出土している。壺Fcに分類され、体部はやや長胴傾向にある。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は体部から口縁部にかけて横方向のハケにより仕上げられている。内面には焦げの付着が認められる。

須恵器 梗が2個体(708・709)出土している。2個体とも楕Aalに分類されるものである。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、平底をなしている。2個体とも器壁が厚く仕上げられている。708の内面には煤の付着が認められる。

時期 出土遺物から南構区-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.70地点(図版27 写真図版53 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.72地点の南西側に位置する(第336図)。高坏の坏部が単独で出土している。

出土遺物 土師器の高坏(711)が出土している。高坏Beに分類され、坏部のみ残存する。体部は外面が縱方向のハケの後口縁部付近が指オサエ、内面が横方向のハケの後斜方向のヘラミガキ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。内面のヘラミガキはわずかに暗文状をなしている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



No.71地点(図版84 写真図版196 附表100)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.72地点の北西側に位置する(第336図)。

出土遺物 台石(S51)が出土している。長楕円形をなす自然石を利用したもので、上面に使用痕が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。



第337図 S51出土状況

No.72地点(図版84 写真図版196 附表100)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.71地点の南側、No.70地点の北東側に位置する(第336図)。

出土遺物 台石(S49)が出土している。扁平な自然石を利用したもので、上面に使用痕が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。

No.73地点(図版27 写真図版96・97 附表50)

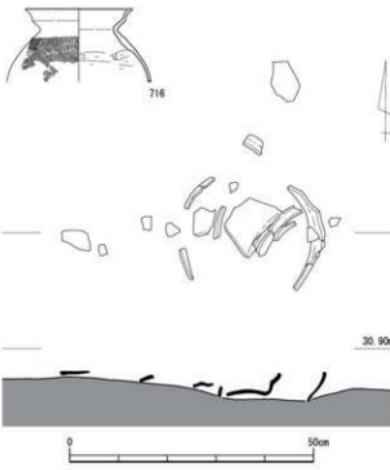
検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No.74地点の南西側に位置する(第334図)。

出土遺物 土師器の皿が4個体(712~715)出土している。

712は口縁部のみの残存で、内外面とも横ナデにより仕上げられている。714と715は皿Ad4に分類されるもので、手づくね成形によりつくられている。713は皿Ad3に分類される。底部から体部にかけての外面が指オサエとナデにより仕上げられ、他は横ナデにより仕上げられている。内面に煤の付着が顕著に認められ、灯明皿としての使用が考えられる。

714も手づくね成形によるものであるが、体部から口縁部にかけて内湾傾向にある。調整は713と基本的には同じであるが、底部内面はナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構X-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



No.74地点

(図版27 写真図版53・97 附表50)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No.73

地点の北東側に位置する(第334図)。716の小片が一箇所に集中した状態で出土している(第338図)。その出土状況から、土器がその場で押しつぶされたものと考えられる。

出土遺物 土師器の甕(716)が出土している。

甕Cbに分類される。肩部から口縁部にかけて残存し、口縁部は複合口縁をなす。体部外表面はハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。肩部から頸部にかけての内面は、横方向のナデにより仕上げられている。

時期 南構IV期に位置付けられる。

第338図 No.74地点土器出土状況

No.75地点(図版27 附表50)

検出状況 南地区中央部南西側(第320図)、No.76地点の西側にあたる(第340図)。小片が散乱した状態で出土している。

出土遺物 須恵器の蓋(717)が出土している。杯Bの蓋と考えられるが、つまみの有無は確認できない。内外面とも回転ナデが基本であるが、天井部と口縁部の間は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.76地点(図版27 附表50)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.77地点の西側にあたる(第340図)。

出土遺物 土師器の壺(718)と鉢(719)が出土している。718は壺Ecに分類され、口縁部を中心に残存し、外面は縱方向、内面は横方向のハケの後、外面が横ナデにより仕上げられている。体部の一部が観察でき、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。719は鉢Bbに分類され、体部内面を横方向のヘラ削り後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部外面は摩滅のため調整は観察できない。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.77地点(図版27 写真図版53・97 附表50)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.76地点の東側に位置する(第340図)。須恵器と土師器が出土しているが、須恵器は比較的形をとどめた状態で、土師器は小片となった状態で出土している(第339図)。須恵器に関しては、当初から形が保たれた状態で置かれていたものと考えられる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺(720)が出土している。口径13.70cmと小型の壺で、壺Gdに分類される。直立する体部に対して口縁部が斜上方に屈曲している。体部外面を縱方向のハケの後ナデ、内面を斜方向(右上がり)のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。頭部内面にはヘラナデが施されている。

須恵器 杯A(721)と杯B(722)が出土している。721は杯Adに分類され、底部は回転ヘラ切りにより切り離され、体部外面は弱いヘラナデにより仕上げられている。722は杯Ba10に分類され、回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、底部外面には爪圧痕が認められる。両個体とも器底が厚く仕上げられている。

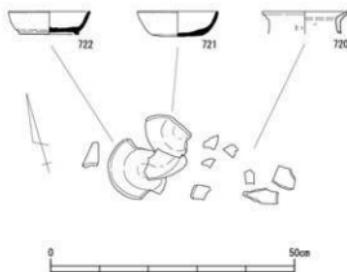
時期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.78地点(図版28 写真図版97 附表50)

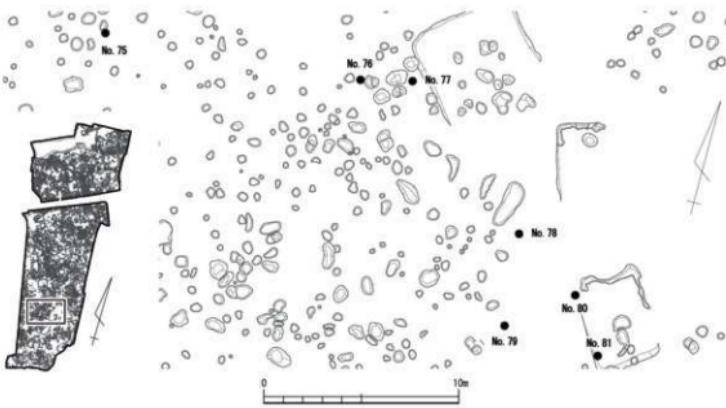
検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.79地点の北側にあたる(第340図)。第1次調査で出土した遺物である。比較的小規模な破片が散乱した状態で出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺・壺・高坏が出土している。壺は723と725の2個体が出土している。723は壺Aaに分類さ



第339図 No.77地点720~722出土状況



第340図 No.75地点～No.81地点位置図

れ、複合口縁壺の口頭部である。外面とも横ナデにより仕上げられている。725は体部から頭部にかけて残存する。外面はナデにより仕上げられている。内面は、下半部が横方向のヘラ削り、中位が縱方向のヘラナデ、上半部から頭部にかけてがナデにより仕上げられている。

甕は724の1個体が出土している。甕Baに分類されるいわゆる山陰系の甕である。体部内面が横方向のヘラ削りによる以外、横ナデにより仕上げられている。

高坏は726と727の2個体で、脚部を中心し残存する。726は脚部が中空タイプである。脚部外表面が、縱方向のハケの後同方向のヘラミガキ、内面は脚柱部が横方向のヘラナデ、裾部はハケの後指オサエとナデにより仕上げられている。坏部は外面がナデにより仕上げられ、内面には暗文が認められる。727は脚部が中空タイプで、坏底部に挿入されている。脚部外表面は、脚柱部を中心に縱方向のヘラナデの後裾部が横ナデにより仕上げられている。内面は裾部が指オサエにより仕上げられている。脚柱部には絞り痕が認められる。また、坏部内面には放射状の暗文が認められる。

須恵器 728の杯Aの1個体が出土している。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。
時 一期 出土遺物から南構III-1期に位置付けられる(第6章第2節)。杯Aは混入と考えられる。

No.79地点(図版28 写真図版98 附表50)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.78地点の南側、No.80地点の南西側にあたる(第340図)。729がほぼ完存した状態で、口縁部を下側にして単独で出土している。

出土遺物 須恵器の平瓶(729)が出土している。内外面とも回転ナデを基調とし、底部から体部はカキ目により仕上げられている。体部下半と肩部付近の一部には、カキ目の後ナデが加えられている。頭部には、径1.5cmの鉢状の浮文が2箇所に貼り付けられている。

時 一期 出土遺物から南構VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.80地点(図版28・29 写真図版97・99 附表50・51)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.79地点の北東側、No.81地点の北西側に位置する(第340図)。

多くの土器が破片となって散乱した状態で出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺・甕・鉢・甕が出土している。

壺は732の1個体が出土している。732は複合口縁をなす壺で、壺Ccに分類される。口縁部は内側斜方に直線的にのびている。頭部以下内面が指オサエによる以外、横ナデにより仕上げられている。

甕は3個体(730・731・737)出土している。730は甕Ccに分類され、口縁部が横ナデにより複合口縁状をなしている。頭部外面はナデ、体部外面はナデ、同内面は横方向のヘラ削り、頭部内面は指オサエに仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。731は甕Ccに分類され、大きく外反する頭部に対して口縁部が直立する。737は把手付の甕で、甕Kaに分類される。肩部には把手の貼り付け痕が認められる。体部内面は横方向のハケ、外面はナデにより、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部内面に煤の付着が認められる。

鉢は3個体(733~735)出土している。733と734は鉢Baに分類され、逆台形をなす体部に対して口縁部が短く外反している。733は、外面は体部から底部にかけてハケの後、底部が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。内面はナデの後底部付近が横方向のヘラ削りにより、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部内面と外面のヘラ削りの方向が、内面が左から右方向、外面が右から左方向と異なっている。734は体部外面が縱方向の粗いハケの後ナデ、底部外面が横方向のヘラナデ、体部内面が斜方向のヘラ削りにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

735は鉢Beに分類される。調整は733と同じである。内外面のヘラ削り方向が異なる点についても同じである。ただし、体部内面のヘラ削り前に指オサエが施されている。

甕は1個体(738)出土している。738は甕の底部分である。横ナデを中心にして仕上げられ、体部との接合部付近は指ナデにより仕上げられている。内面は、横方向のハケの後一部指ナデが加えられている。

須恵器 壺1個体(736)が出土している。壺Fcに分類され、底部をのぞいてほぼ完形に復元されている。口縁端部は帯状に肥厚している。体部外面は叩き整形後カキ目が加えられ、その後口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。体部内面には当て具痕が認められる。

時 期 出土遺物から南構VI期と南構VII~2期の2時期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.81地点(図版29 写真図版99 附表51)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.80地点の南東側に位置する(第340図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺と高杯が出土している。壺は739の1個体で、頭部から口縁部にかけて残存する。頭部外面には断面三角形をなす突帯が貼り付けられている。内外面とも横ナデにより仕上げられている。高杯は740の1個体である。脚部のみ残存する。外面は脚柱部が縱方向のヘラナデにより面取り状に施され、柄部がナデにより仕上げられている。内面は柄部が指オサエにより仕上げられている。指オサエは柄端部と内面を挟むように施されている。

須恵器 盆が1個体(741)出土している。皿状をなす体部の下面に脚部の剥離痕が認められる。残存するのは1箇所であるが、当初は3箇所あったものと考えられる。底部外面がナデによる以外は、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VII~1期に位置付けられる(第6章第2節)。

第9節 包含層出土土器

1. はじめに

包含層から多量の土器が出土している。報告する土器の約2/3におよぶ量である。これらの土器については、南構遺跡の性格を検討するにあたり有益な情報をもたらすものと考えられる。さらには但馬地域の土器等を検討するうえでも欠かすことのできない資料と考えられる。このため、多くの土器を掲載することとした。

掲載にあたり、上記の土器は大きく①縄文時代、②弥生時代、③古墳時代前期、④古墳時代中期～飛鳥時代、⑤古代～中世の5時期に分類が可能である。そこで上記時期区分の順に報告していくこととする。ただし、すべての土器について時期の特定は困難である。そこで一部の土器については、時期区分と齟齬をきたしたものも認められることをあらかじめ断っておきたい。

なお、詳細な時期については、第6章第2節で検討することにする。そして、本書における土器の分類は、同節での検討結果に基づくものである。

2. 縄文時代(図版30・31 写真図版99～112 附表51～53・97)

(1) はじめに

主な土器74点について報告する(図版30・31)。792の双耳壺を除いては、すべて深鉢である。完存もしくは完形に復元できた個体はなく、多くは口縁部もしくは体部片で出土したものである。底部片については確認することはできなかった。時期的には、早期・中期・後期・晩期に分類できるが、早期が大半を占めている。以下時期ごとに報告する。

(2) 早期

742～788の47点が該当する。外面は押型文、内面はナデを基本としている。

742は外面に山形押型文が3単位認められる。黄島式に近い特徴が認められる。743と744は外面に斜方向の楕円押型文が認められる。745は外面に楕円押型文が認められる。746は外面に楕円押型文が認められ、黄島式に近い特徴が認められる。747は外面に楕円押型文が、内面に条痕が認められる。

748～750・752・753は外面に米粒状押型文が認められる。748は、内面が横方向のナデ、口縁端部が横ナデにより仕上げられている。749と752は、内面がナデ、口縁端部が横方向の指ナデにより仕上げられている。750は、口縁端部から内面にかけてナデにより仕上げられている。753は内面が指オサエ、口縁端部が横方向の指ナデにより仕上げられ、内面下側には擦痕が認められる。

751は外面に斜方向の楕円押型文が認められ、内面は横方向のナデ、口縁端部が横ナデにより仕上げられている。

754・755・757・759・760は外面に楕円押型文が認められる。754は、内面が指オサエの後ナデにより、口縁端部が横方向の指ナデにより仕上げられている。755は内面が横方向の強いナデにより仕上げられている。757は口径が復元でき、27.00cmを測る。内面が指オサエとナデにより、口縁端部がナデにより仕上げられている。759は内面が横方向のナデ、口縁端部がナデにより仕上げられている。

756と758は外面に縦方向に長い楕円押型文が認められる。756の内面は指オサエとナデにより、口縁端部が横ナデにより仕上げられている。758は、内面がナデにより、口縁端部がナデにより仕上げられ

ている。760は内面がナデと指オサエとナデ、口縁端部が横ナデにより仕上げられている。

761・763・770は外面に縱長の菱形に近い楕円押型文が認められる。761の内面はナデにより仕上げられ、上側に斜行沈線が施されている。763と770の内面はナデにより仕上げられている。

762・764・771・773・783は、外面に楕円押型文が認められる。762と771の内面には斜行沈線が施されている。764・773・783の内面はナデにより仕上げられている。

765・772・775・779・780の外面には米粒状押型文が認められる。765と772の内面には斜行沈線が施され、765の口縁端部はナデにより仕上げられている。772と780の内面は横方向のナデにより仕上げられている。また775と779の内面はナデにより仕上げられている。

767と777の外面には斜方向の米粒状押型文が認められる。767の内面は斜行沈線が施され、777の内面は横方向のナデにより仕上げられている。

768・784・786・787の外面には楕円押型文が認められる。特に784の押型文には、上側と下側で楕円方向に変化が認められる。いずれも内面はナデにより仕上げられ、768の上側に斜行沈線が施されている。

769と782は外面に菱形押型文が認められる。769の内面には斜行沈線が施されている。782の内面はナデにより仕上げられている。

766・774・776・778・781・785・788は縱長の楕円押型文が認められ、内面はナデにより仕上げられている。特に785の内面は横方向のナデにより仕上げられている。また766と788はナデの後斜行沈線が施されている。

769と782は菱形押型文が認められる。

この他、図化できなかった小片が20点出土している(798~815・2246・2247)。798と799の外面には楕円押型文が認められ、内面はナデにより仕上げられている。806~808・810・812の外面には米粒状押型文が認められ、内面はナデにより仕上げられている。

(3) 中期

789~791の3個体が該当する。

789は口縁部を中心には残存する小片で、端部は外反気味に丸くおさめられている。わずかに波状口縁の傾向が認められる。外面には撚糸文が認められ、内面は横方向のナデにより仕上げられている。790も口縁部を中心とした小片である。口縁端部は内側から外側へ粘土を折り返し、端部を丸くおさめている。緩やかな波状口縁の傾向が認められる。外面には撚糸文が認められ、内面は横方向のナデにより仕上げられている。789と同一個体の可能性も考えられる。791は体部の小片である。外面は乱雜な撚糸文、内面はナデにより仕上げられている。松元I式の特徴が認められる。

(4) 後期

792~795が該当する。外面には磨消繩文が認められる一群である。

792は双耳壺の把手周辺と考えられる小片である。外面は、鉤形をなす沈線に区画された下側に繩文が施されている。また沈線の上側はナデにより仕上げられている。内面は横方向のナデにより仕上げられている。793は深鉢の体部の小片で、外面に磨消繩文が認められる。また、磨消繩文とは沈線を境とした範囲には繩文が認められる。内面には横方向の条痕が認められる。794も深鉢の体部の小片である。外面には沈線により矩形に区画された内側には磨消繩文が認められ、その外側には繩文が認められ

る。上端部にも沈線の一部が認められる。内面は横方向のナデにより仕上げられている。後期前葉に位置付けられる。795は深鉢の頭部付近の小片である。全体的に外反傾向にある。外面には沈線により区画された磨消繩文が認められ、その外側には繩文が認められる。小片の上側と下側にも沈線の一部が認められる。内面は横方向のナデにより仕上げられている。

(5) 晩期

796と797は外面に条痕が認められるものである。796はさらに1条の沈線が認められる。内面は横方向のナデにより仕上げられている。797は外面に卷貝条痕が認められる。内面は指オサエの後巻貝条痕により仕上げられている。断面が受け口状をなし、口縁部に近い小片である。

3. 弥生時代（図版32 写真図版113・114 附表53・54）

壺・甕・蓋・鉢・高坏の各器種が出土している。

(1) 壺

816～820の5個体を図化した。細頸壺・無頸壺・直口壺からなる。

細頸壺 816の1個体である。外面は横ナデ、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。口縁端部は強い横ナデにより内傾する端面を有する。

無頸壺 818の1個体である。体部から口縁部にかけて内傾し、口縁部に径8mmの紐穴が穿たれている。残存するのは1箇所である。外面は縦方向のハケ、内面は縦方向のていねいなヘラ削りにより仕上げられ、最後に口縁端部内外面が横ナデにより仕上げられている。

短頸壺 aタイプとbタイプが出土している。

aタイプは820の1個体である。820は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部は強い横ナデによる外傾する端面が認められる。体部外面は斜方向のハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられ、その後口縁部外面が横ナデにより仕上げられている。

bタイプは817と819の2個体である。817は口頭部を中心に残存し、口縁部が短く直立している。体部外面が横方向のヘラミガキ、内面が同方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。最後に、口縁部外面には3条の擬凹線が加えられている。819は形態的には817を大型化したものである。体部外面が縦方向のハケ、内面が横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。特に上端部は強い横ナデにより外面が四線状に窪んでいる。また口縁部には径7mmの円形の紐穴が1箇所認められる。

(2) 甕

く字口縁甕・擬凹線甕・ナデ甕・底部片が出土している。

く字口甕 822と823の2個体である。822は、体部外面が縦方向のハケ、内面が横方向のヘラ削り、口縁部内面が横方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。その後口縁端部に3条の擬凹線が施されている。823は内外面とも摩滅のため調整を観察することはできない。口縁端部外面には3条の擬凹線が施されている。

擬凹線甕 821・824・825の3点である。3点とも調整・仕上げは同じである。体部外面が縦方向のハケ、内面が横方向のヘラ削り、その後口縁部内面の横方向のハケの後、内外面が横ナデにより仕上げら

れている。口縁部外面には5条の擬凹線が施されている。824は口縁部が明確な複合口縁をなさないが、複合口縁甕に分類されるものと考えられる。口縁部外面には4条の擬凹線が施されている。825は口縁部外面に2条の擬凹線が施されている。

ナデ甕 826～832の7点である。826はほぼ完形に復元できた個体である。底部はわずかに平底をなし、体部は側卵形をなしている。体部外面は、縱方向のハケの後同方向のヘラミガキが施されている。ただしヘラミガキは部分的である。体部内面は、下半が縱方向のヘラ削り、中位が縱方向と横方向のヘラ削り、肩部が横方向のヘラ削り後、中位以下が板ナデにより仕上げられている。体部調整後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

826以外については、基本的な調整は826と同様である。このなかで828の体部外面のハケは斜方向と横方向が主体で、その後ナデが加えられている。829の頭部内面には横方向のハケが認められる。832の体部外面はナデにより仕上げられている。831の口縁部は、外面が段により複合口縁状をなしているが、内面には変化点は認められない。

底部片 833の1点である。底部の規模から、822と823のタイプに対応する可能性が高いものと考えられる。外面は全面に縱方向のヘラミガキが施されている。

(3) 蓋

834の1個体である。口径10.70cmと比較的小型である。天井部から口縁部にかけての外面は、縱方向のハケの後同方向のヘラミガキ、内面は指オサエの後横ナデにより仕上げられている。その後口縁端部を中心に横ナデにより仕上げられている。つまみは白状をなし、横ナデにより仕上げられている。

(4)鉢

直口鉢とく字形口縁鉢が出土している。

直口鉢 835と836の2個体が出土している。835は小型の鉢で、底部はわずかに平底形態をとどめている。外面はナデ、内面はハケの後底部を中心にヘラ削り、口縁部付近にヘラナデを施し、その後口縁端部が横ナデにより仕上げられている。土器全体が大きく歪んでいる。836はやや突出した平底をなす。体部から口縁部にかけての外面は縱方向のハケ、内面は横方向のハケの後底部付近に指ナデが施されている。最後に口縁端部を中心に横ナデにより仕上げられている。

く字形口縁鉢 837の1個体で、口径25.50cmを測る大型の鉢である。口縁端部は上側からつまむようなナデにより外端面が形成されるとともに、下側に肥厚傾向にある。体部は、外面が縱方向、内面が下半をヘラ削り後、横方向を主体としたハケにより仕上げられている。口縁部は、内面を横方向のハケの後、端部を中心に横ナデにより仕上げられている。端部外面にもハケが施されている。

(5)高坏

838の1個体である。いわゆる近畿北部系の高坏である。体部から口縁部にかけての内面は横ナデにより仕上げられている。口縁部外面には6条の擬凹線が施されている。頭部外面は強い横ナデにより仕上げられている。体部外面は摩滅のため調整は観察できない。

4. 古墳時代前期(図版33・34 写真図版114 附表54・55)

土師器の壺・甕・瓶が出土している。

(1) 壺

839~847の9個体を図化した。壺A・壺C・壺Dの各型式が出土している。

壺A aタイプとbタイプが出土している。

aタイプは839と840の2個体で、口頭部は内外面とも横ナデを基調として仕上げられている。839の頭部外面は縦方向のハケにより、内面は縦方向の指ナデの後横方向のナデにより、それぞれ仕上げられている。

bタイプは841の1個体である。外面はヘラミガキを基調とし、内面はナデにより仕上げられている。外面のヘラミガキは、1次口縁が横方向、2次口縁が縦方向に施されている。

壺C aタイプ・bタイプ・cタイプ・dタイプが認められる。

aタイプ 843の1個体である。843は内外面とも横ナデにより仕上げられ、外面にはヘラナデが部分的に加えられている。

bタイプ 844の1個体である。844は内面がハケの後弱い横ナデにより仕上げられている。外面は、横ナデの後縦方向にヘラミガキが暗文状に施されている。わずかに残存する体部外面もヘラミガキが認められる。精製された土器である。

cタイプ 845の1個体である。845は内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられ、口縁部付近は内外面とも横ナデにより仕上げられている。特に外面のヘラミガキは丁寧に施され、細筋の暗文状となっている。

dタイプ 842の1個体である。体部中位以上が残存し、球形の体部に対して口縁部が直線的に伸びている。体部外面は叩き整形後縦方向のハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、内面が横方向のハケ、外面が横ナデにより仕上げられている。叩き整形が認められることから、弥生土器の可能性も考えられる。

壺D 846と847の2個体である。846はほぼ完存する個体である。体部は、外面がヘラナデ、内面が指ナデにより仕上げられている。口縁部は外面が指オサエの後ナデ、内面が横方向のナデにより仕上げられている。体部を中心に手づくね成形で、全体的に器壁が厚く重量感のある個体である。また全体的に粗いつくりである。847は体部上半から頭部にかけて残存する。体部は外面がハケ、内面が指オサエとナデにより仕上げられ、その後頭部内外面が横ナデにより仕上げられている。

(2) 甕

甕A・甕B・甕Cが出土している。

甕A aタイプ・bタイプ・eタイプが認められる。

aタイプ 861と864の2個体である。

861は、外面が体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後、口縁端部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。864は口縁端部がわずかに肥厚し、わずかに外傾する端面を有する。外面は、体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

b タイプ 862・865～867の4個体である。

862は端部が横ナデにより、水平な端面が形成されている。865は口縁端部に肥厚は認められないが、水平な端面を有する。体部外面はハケの後横方向のナデにより仕上げられている。866と867は口縁部が865に対して直線的で、端部は水平な端面を有する。866は口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。867は体部内面が横方向のハケにより仕上げられている。

e タイプ 863の1個体である。口縁端面の横ナデが弱く、端面がわずかに認められる。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。863は体部外面に煤の付着が認められ、壺の可能性も考えられる。

甕B **a タイプ**が認められる。868～872の5個体である。いずれも基本的な調整は同じである。体部外面を横方向ハケ、内面を横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。ただし、体部外面にハケが認められるのは871に限られる。

甕C **a タイプ**・**c タイプ**～**g タイプ**の各型式が認められる。

a タイプ 848・850・854の3個体である。

848は口縁端部を上から抑えるような横ナデにより内側に肥厚するとともに、水平な端面が形成されている。850は体部がわずかに残存し、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。854の体部内面には横方向のヘラ削りが認められる。

c タイプ 849の1個体である。849の口縁部は、強い横ナデにより口縁部を引き延ばす形でつくられている。

d タイプ 855と858の2個体である。2個体とも体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

e タイプ 851～853・856・857の5個体である。

851の口縁端部は両端部をつまむような横ナデにより仕上げられている。体部外面をハケ、内面を横方向のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。856は、端部が外方へ引き延ばされ上端面を有する。外面は体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。さらに体部内面はハケにより仕上げられている。

f タイプ 860の1個体である。860は口縁部がわずかに外反傾向にある。内外面とも横ナデにより仕上げられている。

g タイプ 859の1個体である。859は口縁部が受口状をなさず直線的である。内外面とも横ナデにより仕上げられている。また、体部内面は横方向を主体としたヘラ削りにより仕上げられている。

(3) 瓶

873の1個体が出土している。いわゆる山陰型瓶である。口縁部付近が残存している。外面は縱方向のハケの後、突帯が貼り付けられ、横ナデにより仕上げられている。突帯幅は1.70cmを測る。内面は、突帯より下側が縱方向を主体としたヘラナデ、上側がナデにより仕上げられている。また、突帯に対応する箇所は指オサエ痕が顯著である。

5. 古墳時代中期～後期(図版34～51 写真図版114～129 附表55～67)

当該期の土器は、土師器と須恵器が出土している。土師器については時期の特定できないものもあり、器種によっては古代まで下る可能性のあるものも認められる。

(1) 土 師 器

壺・鉢・高坏・瓶・把手・竈の各器種が出土している。

壺 本書で報告する土器のなかで最も多く出土している器種である。口縁部から底部まで残存するのはわずかで、多くは体部上半から口縁部にかけてのものである。

壺D・壺E・壺F・壺I・壺J・壺G・壺Hが出土している。いずれのタイプにおいても、口縁部内外面は横ナデによる仕上げが基本となっている。また、体部内面が横方向のヘラ削り、外面が縱方向のハケにより仕上げられている。

壺D aタイプとbタイプが認められる。

aタイプ 876と911の2個体である。

876は短頸壺に近い形態であるが、口径が大きいことから壺として報告する。体部内面はヘラ削りの後ハケにより仕上げられている。丁寧なハケである。口縁部内面はハケの後横ナデにより仕上げられている。911も口縁部内面は横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。

bタイプ 877の1個体である。877は、体部内面が横方向のハケの後ヘラ削りが施されている。

壺E aタイプ～eタイプの各型式が認められる。

aタイプ 890・923・935の3個体である。890は口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。923は体部が卵形をなし、口縁端部が上方に摘み上げられている。体部内面は、横方向のヘラナデにより仕上げられている。935は頭部内面にヘラ削りが施されているが、薄い仕上げとはなっていない。口縁端部には端面が認められ、強い横ナデにより凹線状をなしている。890は、口縁内端部を中心としたつまむような横ナデにより、内端部がわずかに上方に肥厚傾向にある。

bタイプ 887・897・899・902・903・920の6個体である。

897は、内端部をつまむ意識がほとんど認められない、あるいはわずかであるものである。断面は肥厚せず方形をなしている。897と899は口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。920は外端部を中心とした横ナデが認められる。口縁部内面は横方向のハケにより仕上げられている。

902と903は外端部を中心に強い横ナデを施し、拡張させている。ともに大型の壺である。902は口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。頭部内面は強い横ナデにより、体部外側はハケの後ナデにより仕上げられている。903は、902ほどつまみ出しが顕著ではない。口縁部内面は横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。

cタイプ 878・879・885・888・889・891～896・898・900・901・904～909・921・924の22個体である。

878は口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデが施されている。879は口縁部外側が縦方向のハケの後、横ナデが施されている。888は口縁部外側が縦方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。

889・891・893は、口縁内端部を中心とした摘むような横ナデにより、内端部がわずかに上方に肥厚傾向にある。891と893は、口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。891と892の体部内面は、横方向のハケの後ヘラ削りにより仕上げられている。892の体部外側は、ハケの後斜

方向のヘラミガキが加えられている。

894～896・898は、内端部をつまむ意識がほとんど認められない、あるいはわずかであるものである。断面は肥厚せず方形をなしている。このなかで895と896の体部内面は、ヘラ削り後ハケが加えられている。また896の口縁部内面は、横方向のハケにより仕上げられている。898は口縁部内面が斜方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。

900と901は口縁内端部を強くつまむ傾向が顕著なものである。2個体とも口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。901は上方への摘み上げが顕著である。

904～909は口縁部が「く」字形をなさず大きく外反し、端部が方形に仕上げられている。頭部内面の口縁部と体部境が不明瞭である。このなかで、904は体部内面が粗い横方向のハケの後、同方向のヘラ削りにより仕上げられている。905は外端部をつまむ意識が認められる。908は、口縁部内面が横方向のハケ、外面が縱方向のハケの後、端部内外面が横ナデにより仕上げられている。

921は、体部内面が横方向のハケの後横方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。

d タイプ 874・875・880～884・886・910・912～918・937の17個体である。

874は数少ない全体が復元された甕である。体部は球形をなすが、底部はわずかに平底傾向にある。体部は、内面がヘラ削り後ハケ、外面が不定方向のハケにより仕上げられている。875は体部中位から口縁部にかけて残存する。体部内面はナデにより仕上げられ、口縁部内面は横方向のハケの後横ナデが施されている。外面に被然痕が認められる。

881～883は、口縁部内面が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。883は形態的に壺形土器に近いが、外面に煤が付着していることから甕として報告する。884と886は、口縁部外面が縱方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。912は、口縁部内面は横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。

913～916は上記と形態的には同じであるが、口縁外端部が強い横ナデによりつまみ出されている。このなかで、914の体部内面は横方向のナデにより仕上げられている。916は体部が卵形をなしている。

917と918は口縁端部が丸くおさめられている。917の体部内面はていねいなヘラ削りにより仕上げられ、部分的に細筋のヘラナデが加えられている。918は口縁部内面が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。937は口縁部内面がやや雑な横方向のナデにより仕上げられている。

e タイプ 928の1個体である。928は、体部内面がヘラ削り後、粗い横方向のハケが部分的に加えられている。

甕F aタイプ～cタイプ・eタイプの各型式が認められる。

a タイプ 919と963の2個体である。919の口縁端部は凹線状をなし、口縁部内面は横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。963は体部最大径が肩部付近にあり、口縁部が大きく外反している。外面は、体部から口縁部にかけてハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

b タイプ 922・936・942・947・948・951・955・956・958～962の13個体である。体部外面の縱方向のヘラ削り、同外面の縱方向のハケ、口縁部内面の横方向のハケ、同外面の横ナデが基本的な調整である。

922は口縁部が短く直線的である。体部内面は縱方向のヘラ削りにより仕上げられている。936は内面

が体部・口縁部とともに横方向のハケにより仕上げられ、その後口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面全面に薄く煤の付着が認められる。942の口縁端部には2条の浅い沈線が認められる。体部はナデにより仕上げられている。内面は体部から口縁部にかけて横方向のハケが認められ、その後口縁部が横ナデにより仕上げられている。

947の頭部外面には、口縁部整形時の指オサエ痕が認められる。体部内面のヘラ削りは粗い仕上げで、器厚が一定していない。948は口縁部内面の横ハケが認められず、横ナデにより仕上げられている。951は頭部内面が横ナデにより仕上げられている。

955は口縁部が内清気味に立ち上がり、端部が上方に摘み上げられている。体部は、外面がハケ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。胎土中に5mm大の礫の混入が顕著である。958は体部内面が斜方向の粗いヘラ削りにより仕上げられている。

956と958は口縁部が緩やかに外反し、端部が上方に摘み上げられている。体部外面のハケ、口縁部内外面の横ナデは共通している。一方956は体部内面が指オサエとナデにより仕上げられているのに対して、958の体部外面は粗いヘラ削りにより仕上げられている。

959～962は、口縁部が短く「く」字形に屈曲し、端部が上方に摘み上げられるタイプである。体部最大径が肩部付近にあり、球形をなさない。いずれも、体部外面が縱方向のハケ、内面が斜方向のヘラ削りの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。このなかで、960の体部内面は、縱方向のヘラ削りの後、頭部付近が横方向のヘラ削りが加えられている。961の口縁部内面は、横方向のハケの後横ナデが施されている。

cタイプ 939～941・949の4個体である。体部外面の縱方向のヘラ削り、同外面の縱方向のハケ、口縁部内面の横方向のハケ、同外面の横ナデが基本的な調整方法である。

940は口縁部内面のハケが認められない。941は口縁部外面がナデにより仕上げられ、端部のみ横ナデにより仕上げられている。

949は、体部内面が横方向のハケにより、口縁部外面が指オサエの後ナデにより仕上げられている。内面に多量の煤の付着が認められる。

eタイプ 950の1個体である。950は口縁部内面が横ナデにより仕上げられている。体部内面のヘラ削りは難な仕上がりである。

甕I aタイプ～cタイプの各型式が認められる。

aタイプ 943と944の2個体である。

943と944は口縁部が長い点が特徴的である。外面は体部から口縁部にかけて縱方向のハケが施され、その後口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のハケ、口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。944の体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

bタイプ 945の1個体である。945は、口縁部が厚く短い点がaタイプと大きく異なる。口径45.50cmを測る大型品である。体部内面は横方向のヘラ削り、外面はナデにより、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

cタイプ 946の1個体である。946は945を小型化したタイプである。ただし口縁端部には上方への摘み上げが認められる。内面は体部から口縁部にかけて横方向のハケを主体とし、体部の一部が横方向のヘラ削りが施されている。外面は、体部を縱方向のハケの後口縁端部が横ナデにより仕上げられている。

甕J aタイプとbタイプの各型式が認められる。

a タイプ 952の1個体である。952は口縁部が「く」字形に短く屈曲する、比較的大型の甕である。基本的な調整方法は他の甕とはほぼ同じである。ただし体部外面はハケの後ナデにより仕上げられている。

b タイプ 953・954・957の3個体である。

953は体部が球形をなすもので、頭部内面は横ナデにより仕上げられている。以外の調整は、他の甕と同様である。954と957は形態的に同タイプに分類されるものである。体部最大径が頭部付近にあり、口縁部が水平方向に屈曲し、端部が上方に摘み上げられている。954は、体部が外面を縦方向のハケの後ナデ、内面をハケの後ヘラ削りにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。957は体部外面がナデにより仕上げられ、ハケ目は認められない。

甕G a タイプ～c タイプの各型式が認められる。

a タイプ 927の1個体である。口縁端部は外側に肥厚傾向にある。

b タイプ 931の1個体である。931は、体部内面が斜方向のヘラ削りにより仕上げられ、焦げの付着が顕著である。

c タイプ 925・926・929・930・932～934の7個体である。

925の体部内面は斜方向のヘラ削りにより、口縁部内面は横方向のハケの後端部が横ナデにより仕上げられている。929は口縁部の器壁が厚く、体部内面が斜方向のヘラ削りにより仕上げられている。930も口縁部が厚く、体部内面のヘラ削りは不定方向に施されている。口縁部内面は横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。932は口縁部内面が斜方向のハケにより仕上げられている。934は体部内面が横方向のヘラナデ、外面が指オサエとナデにより仕上げられている。口縁部も厚く仕上げられている。

甕H 938の1個体が出土している。938は口径32.65cmと大型の甕で、最大径が口径をわずかに超える程度である。体部内面は、斜方向のハケの後部分的に縦方向のヘラナデが加えられている。ヘラナデは、上方向と下方向の2方向の動きが認められる。内面に焦げの付着が認められる。

鉢 964～980・982・1000の19個体を図化している。鉢A・鉢B・鉢C・鉢Eが出土している。

鉢A 979・980・982が出土している。

979は外面とも丁寧な横方向のヘラミガキにより仕上げられている。980は底部がわずかに平底をしている。外面はナデを基本とし、下半はハケが加えられている。内面は下半がヘラナデ、上半が横方向のナデにより仕上げられている。その後口縁部が内外面とも横ナデにより仕上げられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。底部付近外面にはヘラ記号状の沈線が認められる。

982はわずかに残存する小片である。比較的大型の鉢と考えられる。体部は、内面がハケ、外面がナデにより仕上げられている。口縁部は、端部を上方へつまむようなナデにより仕上げられている。

鉢B b タイプ・c タイプ・d タイプが出土している。

b タイプ 966・970～975の7個体である。

966は、外面が体部を縦方向のハケの後部分的にヘラナデ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、口縁部が横ナデの後、体部が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

970～975はいずれも口縁部が内外面とも横ナデにより仕上げられている。970は内外面とも横ナデにより仕上げられている。971は、体部内面が横方向のヘラ削り、外面が縦方向のハケにより仕上げられている。972は、口縁端部を摘まむような横ナデにより、外傾する端面が認められる。また、直線的な体部に対して底部との境が明瞭に屈曲している。体部は、外面上半がナデ、下半が手づくねにより、内面が斜方向のヘラ削りにより仕上げられている。底部外面にはわずかにハケ目を観察することができ

る。973は体部が全体的に内湾傾向にある。体部外面は横方向のヘラナデの後ナデにより、内面は同方向のヘラ削りにより仕上げられている。974は、体部外面が指オサエとナデにより仕上げられ、内面体部上半が横方向のナデにより仕上げられている。口縁部と体部下端との器厚の差が顕著である。975は内外面とも手づくね成形により仕上げられている。

c タイプ 967~969の3個体である。

967は、体部上半が直立傾向にあり、口縁部が短く外反するタイプである。967も基本的な調整は968・969と同じである。

968と969は体部が逆台形錐傾向にある。口縁部の断面形がナイフ形をなし、外面において口縁部と体部の境が不明瞭である。2個体とも、体部は外面が斜方向のハケ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、968が内外面とも横ナデにより仕上げられているのに対して、969が内面を横方向のハケにより仕上げられている。

d タイプ 977の1個体である。977は、体部外面が指オサエとナデ、内面が縦方向のヘラ削りとヘラナデにより仕上げられている。口径6.10cmと小型の土器である。

鉢C 1000の1個体が出土している。

1000は底部を中心に残存する。底部はわずかに平底状をなし、指オサエの後粗い一定方向のヘラミガキにより仕上げられている。体部は大きく内湾しながら立ち上がり、外面は指オサエとナデにより仕上げられている。上端部にはわずかに横方向のヘラミガキが認められる。内面は、横方向のヘラミガキの後暗文が丁寧に施されている。暗文は体部に放射状に施され、その後見込み部に圓錐状に施されている。ただし見込み中心部は摩滅のため、詳細は観察できない。

鉢E a タイプと**b タイプ**が出土している。

a タイプ 964の1個体である。体部は、外面が指オサエの後斜方向のハケ、内面が横方向のヘラ削り、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

b タイプ 965と976の2個体である。965は球形の体部に対して口縁部が短く斜方向にのびるタイプである。口径6.65cmと小型の鉢である。体部内面は指オサエとナデにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部外面は摩滅のため調整を観察することはできない。

976は壺形をなす小型の鉢である。口縁部は体部に対して折り返され、横ナデにより仕上げられている。体部外面は斜方向のハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。体部の器厚と口縁部の器厚の差が顕著である。

978はミニチュアの鉢である。口径はわずか2.30cmである。すべて手づくね成形によっている。

981は把手付椀である。口縁部直下に把手が1箇所に付くものである。把手は舌状をなし、指オサエにより仕上げられている。幅4.20cm、長さ5.20cmと体部に対して大型で、3.00cm反りあがっている。把手と体部との接合法については直接観察することができなかつたが、内面の状況から挿入されていないものと判断される。体部内面は横方向のヘラ削り、同外面はハケ、口縁部内外面は横ナデにより仕上げられている。

高坏 高坏A・高坏B・高坏C・高坏Dと脚部が出土している。

高坏A a タイプが出土している。1001と1002の2個体である。

1001は口径24.20cmを測る大型品である。坏部は内外面とも横ナデにより仕上げられ、口縁端部はわずかに上方へ摘み上げられている。坏底部内外面はナデにより仕上げられている。1002は坏部上半の残

存で、内面は斜方向のハケの後ナデにより仕上げられている。外面はナデにより仕上げられ、その後口縁部が横ナデにより仕上げられている。口縁端部はわずかに外反傾向にある。

高坏B a タイプ・b タイプ・d タイプが出土している。

a タイプ 1003の1個体である。1003は大型で、内外面とも横ナデにより仕上げられている。

b タイプ 1005と1006の2個体である。

1005は、坏部内外面を横ナデの後、坏部内面に横方向の、坏底部に放射状の暗文が施されている。坏底部外面はナデにより仕上げられている。坏部内面の暗文は、いくつかに分割して施されているようである。1006は、坏部外面が縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は斜方向のハケの後に暗文が施されている。暗文は、坏底部が放射状、坏部が斜方向に施されている。坏部の暗文が先に施されている。

d タイプ 1007の1個体である。1007は口縁部の外反が顕著である。外面は坏底部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部外面と坏部内面が横ナデにより仕上げられている。その後内面に放射状に暗文が施されている。暗文は、暗文相互の切り合い関係から時計回りに施されていることがわかる。

高坏C a タイプ・c タイプ・d タイプが出土している。

a タイプ 1004の1個体である。1004は形態的に楕形に近いが、口縁部に外反が認められることから、ここでは坏形に分類している。坏部内面をナデの後、口縁部内外面を横ナデにより仕上げ、その後内面には暗文が、外面には横方向のヘラミガキが施されている。内面の暗文は細筋で放射状に施されている。見込みにも施されている。外面のヘラミガキは部分的である。さらに外面底部付近は横方向のヘラナデにより仕上げられている。

c タイプ 1008~1016の9個体である。

1008~1016は口縁部が直立傾向にあり、内外面を挟むような横ナデにより薄くおさめられている。坏部の調整は横ナデとヘラミガキの両者が認められる。1008~1010・1012・1014の内外面の調整は横ナデを基本としている。1008は外面に化粧土の塗布が認められる。1010の脚部との接合部外面は、縱方向のハケが認められる。1012と1014は、内面に放射方向の暗文が施されている。

1011・1013・1015・1016の坏部の調整は、ヘラミガキを基本としている。1011は横方向に施され、細かい単位である。外面については摩滅のため観察できない。また器壁が厚く仕上げられている。1013は、内面が縱方向、外面が下半を縱方向、上半を横方向のヘラミガキにより仕上げられている。特に外面のヘラミガキはていねいに施されている。脚部との剥離痕から、坏部と脚部の接合は挿入法によるものと理解できる。1015と1016は内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられ、内面には放射状の暗文が施されている。

d タイプ 1017~1021の5個体である。

1017~1021は、口縁部が内外面を挟み込むような横ナデと平行して、外側に折り返されている。1017は、坏部外面を縦方向のハケの後、内外面が横ナデにより仕上げられている。その後内面に坏底部の中心部を起点とした放射状の暗文が施されている。暗文は細筋で反時計回り方向の順に描かれている。脚部付近の接合痕の状況から、脚部との接合は挿入法と考えられる。1018は、坏部内外面を横ナデ後、内外面に放射状の暗文が施されている。内外面とも下→上→下方向の動作を基本とし、反時計回りに施されている。1019は、外面が縦方向のハケ、内面が横ナデにより仕上げられている。1020と1021も内外面を横ナデの後、内面に放射状の暗文が施されている。

高坏D c タイプ～e タイプが出土している。

c タイプ 1024と1027の2個体である。

1024は坏部下半がナデにより仕上げられ、暗文は反時計回りの順に施されている。1027は横方向のハケの後暗文が施されている。内面はハケにより仕上げられている。

d タイプ 1025の1個体である。1025は、段より下側は指オサエ、上側は横ナデにより仕上げられ、内面は横ナデにより仕上げられている。暗文は時計回りの順に施されている。

e タイプ 1022・1023・1026の3個体である。段より下側は指オサエ、上側は横ナデにより仕上げられている。

1022の内面は横ナデにより仕上げられている。1023と1026は横方向のヘラミガキの後、放射状の暗文が施されている。内面はヘラミガキにより仕上げられている。1026の暗文は坏底部と体部との境で途切れているが、わずかに段差があるため、基本的に口縁部から坏底部まで連続するものである。坏底部中央の剥離痕から、脚部との接合は挿入法によるものと理解できる。

脚部 1028～1042の15点図化している。どのタイプの坏部と対応するのかについては明らかにしない。「ハ」字形に屈曲するタイプと、屈曲しないタイプが認められる。

「ハ」字形に屈曲するタイプは1028～1040の13点である。1028は外面全面が摩滅により調整は観察できないが、裾部内面は強い指ナデにより仕上げられている。このため裾端部が波状を呈している。1029は、裾部外面が斜方向のハケ、内面が指オサエにより仕上げられている。脚柱部外面は横ナデにより仕上げられている。裾端部は横ナデにより端面をなしている。1030は、脚裾部外面をハケの後ナデ、その後脚柱部が縱方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面はナデにより仕上げられている。1031は内外面とも摩滅傾向にあるが、内面中位は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。1032は、外面が横方向のナデの後縱方向のヘラナデにより、内面が横方向のハケの後同方向のヘラ削りにより仕上げられている。上端部付近に円形の透かしの一部が1箇所残存している。復元される径は6mmである。1033は脚柱部が中実となっている。脚柱部外面は縱方向のヘラナデにより仕上げられ、その後脚裾部内外面が横ナデにより仕上げられている。坏底部がわずかに残存し、内面には放射状の暗文が認められる。1034は、外面が斜方向のハケの後脚柱部を中心に縱方向のヘラナデ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。最後に脚裾部内外面が横ナデにより仕上げられている。1035外面の調整は1034と同様である。内面は脚裾部が指オサエにより仕上げられている。脚部上端の剥離痕から、坏部に挿入されていたことが理解できる。また脚裾部外面に布目を観察することができる。1036は、脚柱部外面が縱方向のヘラナデ、内面が横方向のヘラ削りとヘラナデの後、裾部内外面が横ナデにより仕上げられている。1037についても全体的に摩滅傾向にあるが、基本的に1036と同様の調整である。1038は、外面が指オサエとナデにより、内面が指オサエとハケにより仕上げられている。裾端部はヘラナデにより仕上げられている。上端部の剥離痕から坏底部に挿入されていたことが理解できる。1039は、脚柱部が内面を横方向のヘラ削り、裾部が横ナデにより仕上げられている。外面は摩滅のため観察できない。1040は内外面ともナデにより仕上げられている。

「ハ」字形に屈曲しないタイプは1041の1点である。外面は縱方向のハケ、内面はヘラナデにより仕上げられている。その後裾端部内外面が横ナデにより仕上げられている。坏底部内面はナデにより仕上げられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。

1042は脚柱部から坏底部まで残存するものである。ただし両者の接合法については観察できなかつ

た。脚柱部外面は縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。坏底部内面には放射状の暗文が認められる。また、脚柱部のヘラナデは面取り状に施されている。

瓶 1043と1044の2個体を図化している。

1043は口縁部付近を中心残す。外面は縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、口縁部が横方向のハケ、体部が横方向(左→右)のヘラ削り、体部と口縁部の中間がナデと指オサエにより仕上げられている。口縁端部は内縁部を中心とした横ナデにより、わずかに外類する端面となっている。

1044は完形に復元できた個体である。外面は指オサエの後縦方向を主体としたハケ、その後口縁部を中心にナデにより仕上げられている。内面は、体部が斜方向のヘラ削り(下→上)、口縁部付近がハケの後ナデにより仕上げられている。その後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。特に内縁部を中心とした横ナデにより、内側上方に摘み上げられている。また把手が中位よりやや下側に貼り付けられている。底部は、体部の延長部分が接地し、黃子は認められない。接地面内面は内傾し、内面はナデにより仕上げられている。接地面はナデもしくは未調整である。内面には径4mmの刺突痕が4箇所に認められる(第341図)。器壁を貫通するものではなく、桟木等を渡すための機能をなしていた可能性を考えられる。いずれも接地面からの高さは8mmである。

把手は指オサエを基本に仕上げられ、舌状をなす。幅5.30cm、長さ3.30cmを測る。2個一対が相対する位置に貼り付けられている。

把手 1045~1053の9点を図化している。把手のみの残存であるため、取り付けられていた器種を特定することはできない。瓶・甕・鉢などが考えられる。またその形態から、舌状をなすもの、牛角状をなすもの、つまみ状をなすものに分類できる。

舌状をなすものは1045~1051の7点である。いずれも指オサエとナデにより仕上げられている。1045は、幅5.00cm、長さ5.20cmを測る。体部とは挿入法により接合されている。1046は、幅4.25cm、長さ4.35cmを測る。体部に挿入されていたものと考えられる。1047は、幅5.30cm、長さ4.45cmを測り、体部に貼り付けられている。1048は、幅5.80cm、長さ4.25cmを測る。1049は、幅5.50cm、長さ5.20cmを測る。体部内面は横方向のヘラ削りが施されている。1050は、幅4.10cm、長さ3.20cmを測る。体部内面はハケが施されている。1051は、幅5.80cm、長さ4.30cmを測る。体部に貼り付けられており、体部内面はハケの後ヘラ削りにより仕上げられている。

牛角状をなすものは1052の1点のみである。幅3.10cm、長さ6.35cmを測り、体部に挿入されている。把手下側はナデにより、上側は指オサエにより仕上げられている。体部内面は横ナデにより仕上げられている。

つまみ状をなすものも1053の1点である。全体が指オサエにより成形され、体部に挿入されている。体部内面はナデ、外面はヘラナデにより仕上げられている。幅3.85cm、長さ3.75cmを測る。全体的に粗いつくりである。

甕 多くの破片が出土しているが、全体を復元することはできなかった。本節では代表的なバーツを中



第341図 1044 底部内面

心に1073～1086の14点を回復した。

1073～1077は底もしくは底を中心に残存するものである。1073は底のコーナー部分で、下面是ヘラ削りにより仕上げられている。1074は底そのものは剥離している。体部外面はヘラ削り、内面はヘラ削りにより仕上げられている。残存する底下端部はナデにより仕上げられている。1075は底コーナーやや中央部寄りである。底は指オサエとナデにより仕上げられている。口縁部外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。1076は底中央部と考えられる。底は口縁部に対して鋭角に立ち上がり、横方向のナデにより仕上げられている。焚口部上端はヘラ削りにより、口縁部内面は横ナデにより仕上げられている。1077は底のコーナー部分である。内外面ともハケにより仕上げられ、幅は7.20cmを測る。

1078は口縁部(掛け口)を中心に残存する。体部から口縁部にかけて内湾傾向にあり、端部は内端部も含めヘラ削りにより仕上げられ、水平な端面となっている。外面は縱方向(上→下)のハケ、内面は上部を横方向、下部を縱方向のヘラナデにより仕上げられている。

1079～1085は焚口側部である。1079は底が焚口へ収束する箇所で、底が焚口本体に貼り付けられ、指ナデを主体として仕上げられている。焚口本体外面はハケ、内面は縱方向の強い指ナデにより仕上げられている。1080と1081は、1079の下側部分と考えられる。底の延長部分が突帯状をなし、焚口本体に貼り付けられ、ナデにより仕上げられている。内面は縱方向(下→上)のヘラ削りにより仕上げられている。焚口部側面もヘラ削りにより仕上げられている。

1082～1085は焚口部下端を中心に残存する個体である。底の延長が突帯をなし、下端部まで認められ、焚口部本体に貼り付けられている。突帯を含めた外面はハケ、内面はハケの後ヘラナデにより仕上げられている。焚口部内側面もヘラナデにより仕上げられている。この他、1083は外面が指オサエとナデにより仕上げられている。接地面もヘラナデにより仕上げられている。

1086は体部下端の一部である。外面をハケの後、内面は縱方向を主体としたヘラ削りとヘラナデにより仕上げられている。ただし下端部付近は横方向が主体である。この横方向のヘラ削りは外面まで及んでいる。また接地面はナデにより仕上げられている。

(2) 須恵器

杯蓋・杯・杯B蓋・蓋・高杯蓋・高杯・甌・器台・壺蓋・壺・甌が出土している。

杯蓋　杯蓋c・杯蓋g・杯蓋ℓ・杯蓋m・杯蓋n・杯蓋q・杯蓋r・杯蓋t・杯蓋u・杯蓋v・杯蓋Y・他が出土している。

杯蓋c　1087と1088の2個体が出土している。2個体とも口縁部内面には内傾する端面が認められるが、1088については明確さを欠くものである。1087は天井部の1/3が回転ヘラ削りにより仕上げられている。天井部内面には当て具痕が認められる。1088は天井部のヘラ削りが口縁部付近まで及んでおり、1087より時期的に古い傾向が認められる。

杯蓋g　1089の1個体である。1089は内端部がわずかに沈線状をなすもので、端面の痕跡にすぎない。天井部外面のヘラ削りは全体の2/3におよび、中心部のわずかな範囲はヘラ削りが及ばず、退化ヘラ削りとなっている。さらに、口縁部と天井部の境をなす段もシャープさを欠いている。

杯蓋ℓ　1105の1個体である。

杯蓋m　1111の1個体である。天井部のヘラ削りは全体の1/3の範囲に及んでいる。

杯蓋n　1112と1115の2個体である。天井部のヘラ削りは、1112が全体の1/3の範囲に、1115が全体

の1/2の範囲に及んでいる。

杯蓋 q 1109と1114の2個体である。天井部はヘラ切り未調整である。

杯蓋 r 1138の1個体である。天井部と口縁部の境には沈線が認められ、ヘラ削りは天井部の1/3に及んでいる。

杯蓋 t 1116・1133・1137の3個体である。補助ケズリが認められる。

杯蓋 u 1104の1個体である。天井部にはヘラナデが認められ、全体の1/2の範囲に及んでいる。

杯蓋 v 1107・1108・1113の3個体である。

杯蓋 Y 法量の差から、Y2(1117・1127・1128)・Y3(1118)・Y4(1129～1132・1135・1136)・Y6(1139・1141・1142)・Y7(1143)・Y8(1145)に細分できる。

1129は全体的に粗い胎土で、天井部内面の仕上げナデも円を描くようなナデである。1131は軸の付着が著しく明確に観察できないが、ヘラ切り未調整である可能性が高いものと判断される。その範囲は全体の1/3である。1135のヘラ切り痕にはヘラ先の当たりが多く認められる。1136のヘラ切りの範囲は全体の1/2に及んでいる。1139の天井部には板目状の工具痕が認められる。1140は他の製品と比較して器高が低い点が特徴的で、ヘラ切りの範囲は全体の1/2に及んでいる。

他 残存状況から細分できなかった個体として、1106・1110・1134・1140の4個体が出土している。残存する範囲ではヘラ削りは認められない。1140はヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

杯 杯 a・杯 b・杯 c・杯 e・杯 g・杯 h・杯 i・杯 j・杯 p・杯 r・杯 s・杯 l・杯 m・杯 n・杯 u・杯 q・杯 t・杯 v・他が出土している。

杯 a 法量的な差からa1とa2に細分できる。

a1は1090の1個体である。1090は端面が水平に近く、口径が10.25cmと小さく、より古式の傾向を示している。底部のヘラ削りは全体の2/3に及んでいる。

a2は1091～1093・1095・1097の5個体である。いずれも内傾する端面が認められるが、その端面に差が認められる。1091は1090より端部の内傾度が強く、底部のヘラ削りはやや狭くなっている。1093は、基本的な特徴は1090に近いが、端部の内傾が明確である。1095は内端部がわずかに段をなし、端面の痕跡をとどめている。ヘラ削りの範囲は全体の2/3に及んでいる。1097は口縁端部にわずかに端面の痕跡が認められる。残存する範囲では底部のヘラ削りは認められない。

杯 b 1094の1個体である。底部のヘラ削りは受け部付近まで及んでいる。

杯 c 法量的な差からc1とc8に細分できる。c1は1096と1102の2個体である。1102は底部のヘラ削りが全体の2/3以上に及び、砂粒の動きが顕著に観察される。c8は1120と1123の2個体である。

杯 e 1099の1個体である。杯e1に細分される。

杯 g 1103の1個体で、杯g1に細分される。1103は口縁部の内傾度が強く、底部も明確な平底状をなしている。底部外面中央部は未調整で、その周囲1/2強まで及ぶ退化削りである。

杯 i 1152の1個体である。杯i6に細分される。

杯 j 9個体出土している。法量的な差からj4(1124・1125)・j5(1121)・j7(1122)・j9(1147)・j10(1149・1150)・j11(1151・1153)に細分できる。

杯 p 1180の1個体である。1180は口縁部が直線的であるが、著しく内傾している。底部はヘラ切り後ヘラ削りが加えられている。

杯 r 1174と1175の2個体である。1174は口縁部の外反はわずかであるが、底部のヘラ切り後ナデが

加えられている。補助ケズリが認められ、ナデにより仕上げられている。

杯s 1178の1個体である。

杯ℓ 1164・1168～1170の3個体である。1164は、器高に対して口径が大きい点が特徴的である。

1168の底部は丁寧なヘラ切りが行われている。1169の内面全面に袖の付着が、1170の内面には灰被りが認められる。両個体とも歪みが顕著である。1169と1170の底部は、ヘラ切り後ナデが加えられている。

杯m 1167と1172の2個体である。1167の底部はヘラ切り後ナデが加えられている。

杯n 1171の1個体である。1171は、口縁部が強い回転ナデにより外反傾向にある。

杯u 1173の1個体である。1173の内面にはわずかではあるが灰被りが認められる。

杯q 1179の1個体が出土している。底部はヘラにより切り離されている。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、底部はヘラ切り未調整である。

杯t 1165と1166の2個体である。1166の底部はヘラ切り後ナデが加えられている。

杯v 1176と1177の2個体である。1176の底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。1177の体部下端外面は、回転ヘラ削り後にナデにより仕上げられている。

他 残存状況から分類できなかった個体として、1098・1100・1101・1119・1126・1163が出土している。1098は、底部の約1/2の範囲にヘラ削りが及んでいる。1126には補助ケズリが認められる。1163は器高に対して口径が大きい点が特徴的である。

杯B蓋 1155～1162の8個体を図化した。口縁部内面に返りが認められるものと認められないものに分類され、1156はその判断が困難である。内外面とも回転ナデを基調とし、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

返りが認められるのは1155・1158・1159・1161・1162の5個体である。1155の返りは断面三角形の突帯状をなし、口縁端部のラインより下方には突出していない。1158の返りは明確で、口縁端部のラインより下側まで伸びている。天井部は回転ヘラ削り後ナデが加えられている。1159の返りは1155と1158の中間形態で、返りの先端と口縁端部のラインがほぼ同じである。天井部はつまみが残存しないが、その貼り付けの際のナデ痕が認められる。天井部はヘラ削り後ナデが加えられている。1161の返りの先端は、口縁端部のラインより下側にある。これは口縁部が水平方向に屈曲しているため、基本的には1155と同タイプと考えられる。1162の天井部外面は残存範囲が限られるが、ヘラ切りとみられる。つまみを貼り付けるためのナデが認められることから、杯となる可能性も考えられる。

返りが認められないのは1157と1160の2個体である。1157は、天井部を回転ヘラ削り後擬宝珠形のつまみが貼り付けられている。その後回転ナデにより仕上げられている。内面全面に赤色顔料の付着が認められ、蛍光X線分析の結果、ベンガラとの分析結果が得られている(第5章第8節)。1160は1157とはほぼ同形態である。つまみは残存しないが、その貼り付けの際のナデが認められる。

1156は口縁部が残存しないが、天井部を回転ヘラ削り後擬宝珠形のつまみが貼り付けられている。

蓋 1181と1182の2個体で、杯B蓋より大型の蓋である。1181は口径20.70cmを測る大型品である。口縁部内面には返りが認められるが、断面三角形の突帯状をなしている。1159の大型化したものである。1182は口縁部内面には明確な返りは認められない。口縁端部は水平な端面をなし、内面が鋭く抉られている。返りの退化形態とみることもできる。

高杯蓋 1208の1個体が出土している。杯蓋に鉗状のつまみが付くタイプである。天井部1/3を回転ヘラ削り後、つまみが貼り付けられている。内面には貼り付けの際に使用したと考えられる當て具痕が認め

られる(第342図)。

高杯 無蓋高杯と有蓋高杯、そして脚部が出土している。

無蓋高杯 1190～1192・1196～1201・1212～1216の14個体を図化した。A・C・E・F・G・Hの各タイプが出土している。

無蓋高杯A 1191と1192の2個体である。1191は杯部が深い楕形をなし、杯部中位に2条の断面三角形をなす突帯が巡らされている。突帯間には3条を単位とする波状文が2単位加飾されている。両突帯を起点とする環状把手が貼り付けられていたようであるが、剥離痕のみ観察できる。



第342図 1208内面當て具痕

この剥離痕の下側には、1本の縱方向の鋭利な沈線が認められる。脚部造かしの延長部の可能性も考えられる。口縁部は内外面とも回転ナデ、杯底部内面はナデ、杯底部外面は回転ヘラナデにより仕上げられている。口縁端部は、内面側が強い回転ナデにより凹線状をなしている。

1192は杯部中位を中心に残存する。1191同様2条の突帯が巡らされ、突帯間には5条を単位とする波状文が加飾されている。内外面とも回転ナデを基調とするが、外面下端付近は回転ヘラナデにより仕上げられている。内面全面に灰被り・釉の付着が認められる。

無蓋高杯C 1190の1個体である。口径28.40cmと大型で、口縁部が大きく外反し、端部がわずかに上方へつまみあげられている。杯底部外面のみ回転ヘラ削りにより仕上げられている。

無蓋高杯E 1199と1200の2個体が出土している。1200は杯底部と口縁部の境外面が段をなし、回転ナデにより仕上げられている。杯底部下端部には、方形透かしの両辺の延長と考えられる切込みが1セット認められる。

無蓋高杯F 1201の1個体である。底部中央部付近に脚部との接合の際のナデが認められることから、高杯と判断したものである。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

無蓋高杯G bタイプが出土している。1196～1198の3個体である。いずれも内外面は回転ナデを基調とし、杯底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。1197と1198の杯底部外面は、回転ヘラ削りの後ナデが加えられている。1196については回転ヘラ削りは認められない。

無蓋高杯H bタイプ・cタイプ・dタイプが出土している。

bタイプは1213の1個体である。1213の杯部は内外面とも回転ナデ、脚部内面はヘラナデにより仕上げられている。

cタイプは1216の1個体である。1216の体部と口縁部の境は、顯著な変化点となっている。一方1216の杯底部外面の1/3は回転ヘラ削りにより仕上げられ、その後ナデが加えられている。

dタイプは1212と1215の2個体である。杯底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

有蓋高杯 有蓋高杯Aと有蓋高杯Cが出土している。

有蓋高杯A 1193の1個体である。1193は口縁端部が水平な端面をなしている。杯部外面は受部下まで回転ヘラ削りにより仕上げられ、その後ナデが加えられている。

有蓋高杯C aタイプとcタイプが認められる。

aタイプは1209と1210の2個体である。1210の杯底部外面1/3は回転ヘラ削りにより仕上げられている。脚端部は上方に折り返されている。

c タイプは1211の1個体である。

脚部 脚部A・脚部B・脚部C・脚部D・他の各タイプが出土している。

脚部A a タイプと b タイプが出土している。

a タイプは1218の1個体である。1218は脚裾部が内湾気味に広がり、上部とは段により境をなしている。脚部中位には菱形をなす透かしが3方に認められる。いずれも一辺が6mmからなるものである。

b タイプは1204と1205の2個体である。中位に2条の沈線が認められる。

脚部B b タイプが出土している。

1195・1202・1203の3個体である。1195は長方形透かしの一部が2段にわたり残存し、その状況から2方に開けられていたものと考えられる。1203については2方もしくは3方の可能性が考えられる。3個体の上下の透かし間には、2条の沈線が認められる。

この他a タイプもしくはb タイプの区別ができない個体として、1194・1206・1207が出土している。1194は有蓋高杯の1193タイプに伴う脚部と考えられる。長方形透かしの一部が2箇所残存し、当初は四方に開けられていたものと復元される。1206と1207は長方形透かしが認められるタイプである。残存状況が良好でないため、その段数・個数は不明である。

脚部C b タイプと c タイプが出土している。

b タイプは1219の1個体である。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

c タイプは1214・1217・1220・1221・1224の5個体である。1217は杯部外面が弱い回転ヘラ削りにより仕上げられている。脚部内面下半についても回転ヘラ削りにより仕上げられている。1224の内面は、脚柱部全体を捩じった痕が螺旋状の擦れとなっている。

脚部D a タイプ・c タイプ・d タイプが出土している。

a タイプは1223・1227・1231の3個体である。1223については摩滅のため調整は観察できない。

c タイプは1225・1226・1228の3個体である。1226の脚裾部内面は、回転ヘラナデにより仕上げられている。

d タイプは1222・1229・1230・1234~1236の6個体である。1229は粗い胎土である。

他 脚部と杯部の接合部を中心に残存する。1232と1233の2個体である。1233の杯底部内面には当て具痕が認められる。

甕 1237と1238の2個体が出土している。

1237は外反する頸部に対して口縁部が受け口状をなしている。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。1238は球形をなす体部に対して底部は平底状をなす。底部から体部下半にかけての外面が回転ヘラ削り後、ナデにより仕上げられている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。体部中位と肩部外面に沈線が各1条認められる。残存する範囲において透かし孔は認められない。

器台 1239と1240の2個体が出土している。1239は脚部の立ち上がりが内湾傾向にある。外面には1条の凹線が引かれ、その上側と下側に6条を単位とする波状文が各1セット描かれている。1240は端部が内湾し、その上側は外反傾向にある。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

壺蓋 1144と1154の2個体が出土している。1144の天井部の1/2に範囲には回転ヘラ削りが施されている。1154は天井部に回転ヘラ切り後ナデが加えられている。外面全面に薄く灰被りが認められる。

壺 1241~1246の6個体が出土している。直口壺・短頸壺・他に分類できる。

直口壺は1241~1244の4個体である。1241は口縁部が受け口状をなし、外面には段が認められる。内

外面とも回転ナデにより仕上げられている。1242は口縁部が肥厚し、断面方形をなしている。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、その後肩部外面にカキ目が施されている。1243は口縁部が直立し、肩部に沈線が1条認められる。

1244は、口頭部を中心とした破片と底部から体部にかけての破片からなる。両者は直接接合関係はないが、胎土・色調等の特徴が酷似すること、出土地点がほぼ同じであることから、同一個体と判断して復元・報告するものである。底部は緩やかな丸底をなし、体部は算盤玉形をなす。口縁部はわずかに内湾気味に立ち上がる。内外面とも回転ナデを基調とし、体部外面中位以下は回転ヘラ削り、底部外面はやや粗いヘラナデにより仕上げられている。底部内面は多方向のナデにより仕上げられ、口縁部外面にはカキ目が施されている。口縁部下部外面には2条の、肩部下端外面には1条の沈線が認められる。

短頸壺は1245の1個体である。本個体についても、体部の上半と下半が直接的な接合関係ではないが、同一地点で出土し、胎土等の特徴が酷似することから、同一個体として復元・報告するものである。内外面とも回転ナデを基調としている。底部外面はヘラ切りにより切り離され、平底状をなしている。

1246は体部のみ残存する。内外面とも回転ナデを基調とし、体部下半から底部にかけての外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。また肩部には2条の沈線が認められる。

甕 1247～1263の17個体を図化している。甕A・甕B・甕C・甕D・甕G・甕H・甕I・甕J・他が出土している。

甕A 1247の1個体である。口縁端部が丸味を帯びながらも端面が認められる。端部付近外面には、同じく丸味を帯びた断面三角形の突帶が認められる。

甕B 1256の1個体である。1256は平行叩きによる整形後カキ目が加えられ、内面は当て具痕がナデにより消されている。

甕C 1250・1251・1255・1258の4個体である。aタイプ・bタイプ・cタイプが認められる。

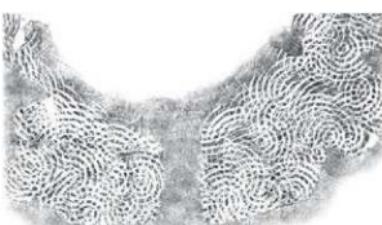
aタイプは1250の1個体である。体部外面が平行叩きにより整形され、その後ナデにより仕上げられている。このため叩き目はほとんど認められない。内面には当て具痕が認められ、下半はナデにより消されている。

bタイプは1251と1255の2個体である。1251は口縁部外面が平行叩きにより整形され、その後回転ナデにより仕上げられている。1255は体部外面が二方向の叩き整形後ナデが加えられ、内面には当て具痕が認められる。

cタイプは1258の1個体である。口縁端部は、内端部を中心とした回転ナデにより断面三角形をなしている。

甕D 1260の1個体である。1260は、体部外
面が二方向の平行叩きの後カキ目が加えられ、
内面の当て具痕がナデにより消されている。

甕G 1254と1257の2個体である。1254は体部外面を叩き整形後カキ目が加えられている。
内面は当て具痕がナデにより部分的に消されて
いる。1257は口縁部外面が回転ナデの後カキ目
が施されている。口縁端部は外側への折り返し
により玉縁状をなしている。



第343図 1252内面當て具痕

甕H 1253の1個体である。体部外面は二方向の平行叩き整形、内面は当て具痕が横ナデにより消されている。

甕I 1261の1個体で、口径13.90cmと小型の甕である。体部は縦方向の平行叩きにより整形され、内面には当て具痕が認められる。口縁部内面は釉の付着が著しく調整を観察することは困難であるが、回転ナデによるものと考えられる。

甕J 1252の1個体である。外面が体部から口縁部にかけて叩き整形後回転ナデにより仕上げられ、その後カキ目が加えられている。体部内面には当て具痕が顕著に認められる(第343図)。

他 1248・1249・1259・1262・1263が該当する。

1248は口縁部内端部が上方へつまみあげられている。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、肩部はカキ目が加えられている。口縁部内面にはヘラ記号状のヘラ先の当たりが認められる。1249は、口縁外端部を下方に肥厚させ断面三角形状をなしている。1259は口縁部外面に6本以上からなる波状文が加飾されている。1262と1263は体部のみ残存する。1262は長胴形の体部で、外面は平行叩き整形後カキ目により仕上げられている。下半部は回転を利用しないカキ目も認められる。内面は当て具痕が顕著に認められる(第344図)。1263も基本的な整形は1262と同様であるが、内面は一部ナデが加えられている。

6. 古代～中世(図版51～65 写真図版129～169・175 附表58・59・67～88)

土師器・須恵器・製塙土器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・白磁・青磁・瓦質土器・丹波焼が出土している。

(1) 土 師 器

杯A・椀・皿・杯B蓋・杯B・杯C・杯D・鍋・托・壺・鍋・不明が出土している。

杯A a～fの6タイプが出土している。

aタイプ a1・a2・a3が出土している。

a1は1338の1個体である。口縁内端部は沈線状をなさないが、内側が強い横ナデにより仕上げられている。底部外面はヘラナデにより仕上げられている。口縁部内面を中心に油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。内外面全面に赤彩が認められる。

a2は1333・1335～1337・1339・1604の6個体である。6個体とも体部下半外面に静止ヘラ削りが加えられている。1333では赤彩が認められる。1339の底部外面はヘラナデにより仕上げられている。

bタイプ 大型(b1)・中型(b2)・小型(b3)の3タイプが出土している。

b1は1322の1個体である。1322は口径22.30cmを測る大型品である。底部内面は横ナデ、口縁部内面と底部外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。口縁部外面は器表面が剥離しており、調整は観察できない。内外面に赤彩が認められる。

b2は1323の1個体である。口径16.20cm、器高5.00cmと、大型の1322より深い傾向にある。口縁部内外面を横ナデの後、口縁部内外面が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。底部外面はヘラナデ



第344図 1262内面当て具痕

により仕上げられている。

b3は1328と1332の2個体である。1328は口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられ、その後横方向のヘラミガキにより仕上げられている。ヘラミガキはていねいに施され、全面に赤彩が認められる。1332は体部下半外面に静止ヘラ削りが加えられている。口縁部内外面に煤の付着が認められ、灯明器としての使用が考えられる。

c タイプ 1316・1329・1340・1341・1343・1344・1355の7個体である。1316は底部を中心に残存し、底部外面は多方向のヘラナデ、内面はナデにより仕上げられている。1329の底部外面はヘラナデ、体部外面下半は静止ヘラ削りにより仕上げられている。また内外面に赤彩が認められる。底部外面はヘラナデにより仕上げられている。

d タイプ 法量によりd1~d7の7タイプに細分できる。

d1は1591の1個体である。口縁部内面には油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。

d2は1540・1578・1592・1605の4個体である。1540・1578・1592の内外面には赤彩が認められる。

d3は1607の1個体である。口縁部内外面には赤彩が認められる。

d4は、1541・1549・1555・1577・1593・1595~1601の19個体である。1541の内外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。底部と体部の境外面は回転ヘラ削りが加えられている。1596の内外面も横方向のヘラミガキにより仕上げられている。底部のナデも丁寧に施されている。1597の底部は、ヘラ起こし後ヘラナデにより仕上げられている。体部と底部の境外面もヘラナデにより仕上げられている。1542・1545・1546・1548・1555を除いては内外面に赤彩が認められる。1598と1601の口縁部内外面には煤の付着が認められ、灯明器としての使用が考えられる。

d5は1581と1606の2個体である。1581の内外面には赤彩が認められる。

d6も1594の1個体である。内外面には赤彩が認められる。

d7は1584~1586・1590・1602・1608の6個体である。1584の口縁部内外面には油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。1584と1585の内外面には赤彩が認められる。1590は、体部と底部境外面が弱いヘラナデにより仕上げられている。

この他、1556についてもdタイプに分類される。

e タイプ 1324~1327・1345・1346・1348~1350・1352・1354・1610の12個体である。1326は口縁部内外面に油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。底部に赤彩が認められる。1327は、底部と体部の境外面は弱い静止ヘラ削りにより仕上げられている。1345は全体的に摩滅傾向にあり調整は観察できないが、底部は内外面とも手づくね成形を基本としている。1346についても同様である。1348は回転ナデを基本としているが、親指を体部と口縁部境外面にあて口縁部を外反させている。全体的に摩滅傾向にあり、調整の詳細な観察は困難である。1349は口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。1324・1325・1327・1349では赤彩が認められる。1350と1352は体部下半外面に静止ヘラ削りが加えられている。1354は口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。

f タイプ 1554・1761~1770・1774・1776~1778・1786・1789・1790・1793~1796の21個体である。f1~f5に細分され、1777・1778がf1に、1761がf2に、1762・1765・1766・1774がf3に、1554・1763・1764・1767~1770・1786・1793・1794がf4に、1776・1795・1796がf5に細分される。1789と1790については、細分は困難である。

1762は、底部と体部の境外面がヘラ削りにより仕上げられている。1765は、体部内外面が回転ナデの

後横方向のヘラミガキにより仕上げられている。1769の口縁部内面には油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。1762の内面と、1761・1764～1768・1789の外外面には赤彩が認められる。特に1766は、底部を含めた外外面全面に認められる。

他 1330・1331・1334・1342・1347・1351・1353・1609も底部の調整等が確認できないため細分は困難であるが、杯Aに分類されるものである。

1331は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。1330と1331は口縁部内外面に煤の付着が認められ、灯明器としての使用が考えられる。1342は体部外端下端が横方向の静止ヘラ削りにより仕上げられている。底部外面は静止ヘラナデにより仕上げられている。

また1342では赤彩が認められる。1609は、摩滅が著しいため底部を含めた調整を観察することは困難である。わずかに口縁部内面に回転ナデを観察することができる。

以上その他、杯Aとは断定できないが1611が出土している。口縁部のみ残存し、口縁端部は強いナデにより内端部にわずかな段が認められる。赤彩が認められる。

椀 楓A～楓Dの4タイプが出土している。

楓A aタイプ・bタイプ・dタイプ・eタイプが認められる。

楓Aaは1566・1567・1587・1739・1741の5個体が該当する。法量から、1739がa1に、1741がa2に、1587がa3に、1566と1567がa4に細分される。1567の口縁部内面に油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。

楓Abは1558・1562～1564・1582・1583の6個体が該当する。1582内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。1583の外外面には赤彩が認められる。

楓Adは、1538・1539・1550～1553・1557・1559～1561・1565・1568～1576・1579・1588・1589・1603・1742・1745の26個体が該当する。1570がd1タイプ、1745がd2タイプ、1560と1571がd3タイプに細分される以外、すべてd4タイプである。1568・1569・1742については細分が困難である。1574と1603の口縁部内面に油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。1538は口径13.50cmと大型の個体である。1603については、底部外面にも煤の付着が認められる。1745は、回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

楓Aeは1744の1個体である。1744は口縁部が大きく内湾し、外外面に赤彩が認められる。

楓B aタイプとbタイプが出土している。

aタイプは1728・1729・1737・1738の4個体である。

bタイプは、1724・1731・1733～1736・1782・1785・1787・1788が該当する。1733～1736・1782・1785がb1に、1724・1787・1788がb2に細分される。1724はヘラ切り後、同一方向のハケ状の仕上げが認められる。1731については法量上の判断は困難である。1734と1736については、胎土・調整の特徴から須恵器楓の焼成不十分な製品の可能性も考えられる。1782の底部中央には径約9mmの焼成前の穿孔が認められる。さらに内面にはヘラ先の当たりにより沈線状をなしている。

この他1730については、底部の切り離しは十分観察できないが、回転糸切りによるものと考えられる。aタイプ・bタイプ



第345図 1713底部

の細分は困難である。

椀C aタイプとbタイプが認められる。

aタイプは、1740・1771・1772・1779～1781・1783・1784が該当する。bタイプは、1725・1746・1773の3個体である。1773は器壁が厚く砂質の胎土である。

椀D aタイプ～dタイプが認められる。

aタイプは、1712～1717・1720・1721が該当す

第346図 1719底部

る。1713の高台疊付けにはヘラの当たりによる段が認められる(第345図)。

bタイプは1723の1個体である。1723は内面に赤彩が認められる。

cタイプも1718の1個体である。1718は高台高が1.80cmと、他の個体より高い点が特徴となる。底部外面は回転ナデにより、内面は指オサエの後ナデにより仕上げられている。

dタイプも1711と1719の2個体である。1711は唯一底部から口縁部にかけて残存する個体である。口径に対して器高が低いが、椀として報告する。底部はヘラ切りにより切り離され、高台が貼り付けられている。体部から口縁部内面は横方向のヘラミガキにより、口縁部外面は横ナデにより仕上げられているが、体部外面については摩滅のため観察できない。

1719も高台高2.00cmと、高台が高い点が特徴的であるが、摩滅のため調整は観察できない。底部を含めた内外面全面に赤彩が認められる。1719の高台は貼り付けではなく、底部から連続してつくりだされている(第346図)。

この他1722は細分が困難である。内外面とも摩滅が著しく調整は観察できない。内面にヘラ先の当たりとみられる沈線が4条認められる。底部を含めた内外面全面に赤彩が認められる。

他 以上の他1726・1727・1732・1757・1758・1760の3個体についても椀と考えられる。いずれも内外面とも回転ナデにより仕上げられている。1758の底部は平高台と考えられる。

皿 皿Aと皿Bが出土している。

皿A aタイプ・bタイプ・cタイプ・dタイプが認められる。

aタイプ 1310・1320・1314の3個体が出土している。形態上の特徴から、前2者がa1に、1314がa2に細分される。1310と1314には赤彩が認められる。1314は口縁端部がわずかに内側へ折り返されている。底部と口縁部の境が不明瞭で、外面のほぼ全面が横方向の静止ヘラ削りにより仕上げられている。さらに底部外面中央付近は、指オサエとナデにより仕上げられている。

皿B 1317～1319・1516・1517・1791・1792の7個体が出土している。1791がb2に、1792がb3に細分され、他はすべてb1に分類される。

1319は、体部から口縁部にかけての外面が回転ナデの後、横方向のヘラミガキにより仕上げられている。底部はヘラ切り後ヘラナデにより仕上げられている。1318の底部内面は多方向のハケが認められる。1516は、底部が回転ヘラ切りにより切り離され、他は内外面とも回転ナデにより仕上られている。内外面とも赤彩が認められる。1517は底部を回転ヘラ切り後ナデが加えられている。1791と1792は口縁部が内外面とも回転ナデにより仕上げられている。手づくねによるものは指オサエとナデを基本とし、口縁部外面は横ナデにより仕上げられている。1317～1319は赤彩が認められる。残存状況が良好なものについては、底部を含めた内外面全面に施されている。



c タイプ 1797～1804の8個体である。1803がc1に、1800～1802がc2に、1797～1799・1804がc3にそれぞれ細分される。全て口縁部が内外面とも回転ナデにより仕上げられている。1799の内外面に赤彩が認められる。口縁部には煤の付着が認められ、灯明器としての使用が考えられる。1803の内外面にも赤彩が認められる。

d タイプ d1～d5に細分される。指オサエとナデを基本とし、口縁部内外面は横ナデにより仕上げられている。

d1は1311と1313の2個体である。1313の底部内面には暗文をわずかに観察することができる。1311は口縁部が「て」の字口縁傾向にある。

d2は1809の1個体である。

d3は1315・1759・1805・1806・1808・1811の6個体である。1759は、底部から体部にかけての外面は指オサエの後ナデにより仕上げられ、他は横ナデにより仕上げられている。その後、内面は縱方向のナデにより仕上げられている。口縁端部内面には、外端部をつまむようなナデにより内傾する端面が認められる。1808は内外面とも回転ナデにより、底部外面がヘラナデにより仕上げられている。また内面には放射状の暗文がわずかに認められる。

d4は1810・1812・1814～1816・1818・1819の7個体である。1810と1816の口縁部内面には油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。1812と1819の内面には布目が認められる（第347図・第348図）。1814は内外面ともナデにより仕上げられている。1816については摩滅のため調整は観察できないが、その形状等から手づくね成形と判断している。

d5は1813と1817の2個体である。1813は口縁部が2段の横ナデにより仕上げられている。

以上その他、1312は口縁部端部がわずかに内側に折り返され、「て」の字口縁の傾向が認められる。

皿B 1321の1個体で、底部を中心には残存する。皿Bbに細分される。底部は、中心部がナデ、高台より外側が回転ヘラ削りにより仕上げられ、その後高台が貼り付けられている。内面は回転ナデにより仕上げられている。

杯B蓋 法量から大型と小型の2タイプが認められる。

大型は1356の1個体である。口径29.70cmを測るが、つまみは残存しない。天井部と口縁部の境が不明瞭である。口縁端部は内端部をつまむようなナデにより四線状をなしている。内外面とも回転ナデを基調とし、天井部外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。全体的に丁寧な仕上げで、内外面に赤彩が認められる。また精良な胎土である。

小型は1357と1358の2個体である。内外面とも回転ナデを基調とし、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。1358は比較的の良い残存で、天井部には鉗状のつまみが貼り付けられている。天井部外面は回転ヘラ削り後、ヘラナデにより仕上げられている。

杯B 1359と1360の2個体が出土している。1359はaタイプに細分される。口径19.10cmを測る大型品



第347図 1812内面



第348図 1819内面

であるが、杯B蓋の1356とは法量的に対応しない。体部から口縁部内外面は回転ナデの後、丁寧な横方向のヘラミガキにより仕上げられている。底部は、回転系切り後高台が貼り付けられている。糸切りは稚拙である。

1360はbタイプに細分される。底部はヘラ切りにより切り離され、その後高台が貼り付けられている。口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。口縁部内外面に油煙痕が認められ、灯明器としての使用が考えられる。

杯C aタイプ～eタイプ・gタイプが出土している。

aタイプ 983～986の4個体である。口縁部内外面が横ナデにより仕上げられ、体部内面には縱方向の暗文が施されている。983は体部から口縁部にかけて、内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられている。暗文は認められない。984は体部から口縁部にかけて、内外面とも横ナデにより仕上げられている。内外面には赤彩が認められる。985は体部外表面をヘラナデ、内面をヘラミガキの後暗文が施されている。986は体部内外面がナデにより仕上げられ、その後暗文が施されている。

bタイプ 990・991・993・995・998・999の6個体である。991の体部外表面はナデにより仕上げられている。993の体部外表面は縱方向のハケにより仕上げられているが、内面については調整を観察できない。995は内外面とも摩滅が著しいが、内面にわずかに暗文が認められる。998は底部外表面が手づくね成形によるものである。体部内面はヘラナデにより仕上げられているが、暗文は確認できない。999も外表面は手づくね成形により仕上げられている。

cタイプ 987・988・992の3個体である。横ナデの後に暗文が施されている。

992の体部外表面は指ナデの後弱い横ナデにより仕上げられている。987は、体部から口縁部にかけて内外面とも丁寧なヘラミガキにより仕上げられ、内面には暗文が施されている。暗文は上下2段にわけて施されている。988は体部外表面が縱方向のハケにより仕上げられている。

dタイプ 989・994・996・997の4個体である。989は体部下半外表面がナデと一部粗いヘラ削りにより仕上げられている。体部内面は横ナデにより仕上げられ、その後暗文が施されている。口縁部は外反せず、外端部を中心とした強い横ナデにより内傾する端面となっている。997の口縁部は989と同様のつくりである。暗文はナデの後に施され、底部外表面は手づくね成形によっている。

eタイプ 1186の1個体である。1186は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が直立している。口縁部は横ナデにより内傾する端面をなしている。底部から体部にかけての外表面は、静止ヘラ削りにより丸底状をなしている。内面は横方向のヘラミガキの後放射状の暗文が施されている。暗文は直線的ではなく、蛇行傾向にある。

gタイプ 1184・1185・1187・1188の4個体である。

1184は底部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁部内外面は横ナデにより仕上げられている。底部外表面は静止ヘラ削り、体部外表面は弱いナデにより仕上げられている。体部内面は粗い縱方向のヘラミガキにより仕上げられている。1185は、内外面とも回転ナデの後、内面に斜方向の暗文が施されている。1187は底部から口縁部にかけて浅い半球形をなす。外表面は、指オサエの後横方向のヘラミガキ、内面は横ナデの後放射状の暗文が施されている。口縁端部は横ナデにより仕上げられている。1188は、1187と同タイプと考えられるが、口縁部外端部を中心とした横ナデにより内傾する端面となっている。体部外表面は指オサエの後ナデ、内面は横方向のヘラミガキの後放射状の暗文が施されている。

杯D 1183の1個体である。直線的にのびる体部に対して口縁部が内側へ折り返され、端部が横ナデに

より仕上げられている。内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面見込みは円を描くようなヘラミガキで、その中心部分は縦方向と横方向のヘラミガキが施されている。底部外面は、指オサエの後部分的なヘラナデにより仕上げられている。

鍋 1054～1072の19個体を図化している。鍋Aと鍋Bが出土している。全て外面は体部から口縁部にかけて縦方向のハケ、内面は口縁部が横方向のハケ、体部は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

鍋A aタイプとbタイプが出土している。

aタイプ 1062～1068・1071の8個体である。

1062は体部内面が横方向のハケの後ヘラ削りが施されている。口縁部外面はハケの後一部横ナデが加えられている。1063は体部内面のヘラ削りの後に横方向のハケが施されている。1064は体部内面が横方向のヘラナデにより仕上げられている。1065と1066は、体部内面のハケの後ヘラ削りが施されている。特に1066のハケ目は他の個体より粗いハケ目である。

bタイプ 1055～1061の7個体である。

1055は口縁部内面が横方向のハケの後、横ナデにより仕上げられている。外面は、体部が斜方向のハケにより仕上げられている。1056の体部内面の一部にはハケが認められるが、ヘラ削りとの前後関係は観察できなかった。口縁部外面はハケの後一部ナデが加えられている。1057は、体部内面が横方向のハケの後ヘラ削りが施されている。体部上部外面は、ハケの後幅の狭いハケ状のものが2単位認められる。1060は、口縁部外面がハケの後横ナデにより仕上げられている。1061は、口縁端部の横ナデを除き、内外とも摩滅のため調整は観察できない。ただし口縁部外面にわずかにハケ目が観察される。

鍋B 1054・1069・1070・1072の4点を図化した。

1054は体部外面が縦方向のヘラナデにより仕上げられている。1069と1070は、体部から口縁部にかけて外面が縦方向、内面が横方向のハケにより仕上げられ、口縁部外面は横ナデにより仕上げられている。1070の体部内面下半はハケの前に指オサエにより成形され、ハケの後にナデにより仕上げられている。1072は、体部から口縁部にかけての外面は縦方向のハケ、体部内面は横方向のヘラ削り(左→右)、口縁部は横方向のハケにより仕上げられている。最後に口縁端部が横ナデにより仕上げられている。口縁部に対して体部の器厚が明らかに薄く仕上げられている。

托 1747～1756の10個体が出土している。内面が大きく落ち込むタイプ(1747～1752)と、平高台をなすタイプ(1754～1756)、輪高台をなすタイプ(1753)が認められる。底部は1753を除いて回転糸切りにより切り離されている。いずれも体部外面は回転ナデにより仕上げられている。

1751の底部では、底面より3mm上側に一度糸切り開始後すぐにとりやめた痕跡が認められる。1753は高台が貼り付けられている。高台の貼り付けにあたっては、粘土塊が高台内側に抑えとして貼り付けられている(写真図版161)。1755の内面は、回転ナデの後横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

壺 1519と1820～1823の5個体を図化したが、いずれも小型の壺である。

1519は壺Eに分類される。口縁端部が内側へ屈曲し、その後上方へつまみあげられている。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内外面には赤彩が認められる。

1820～1823は、底部がいずれも回転糸切りにより切り離され、明確な平底をなす。体部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。このなかで、1822の体部外面は回転ヘラナデにより仕上げられている。1823は全体的に雑なつくりである。

鍋 1824と1825の2個体を図化した。

1824は、半球形の体部に受け口状の口縁部が付くものである。体部外面をナデ、内面を縱方向の粗いヘラ削り後、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。1825は口縁部が「く」字形に屈曲するタイプである。体部の形態は1824とはほぼ同じである。体部外面を多方向のハケ、内面を横方向のヘラ削り、口縁部内面を横方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部中位には把手の剥離痕が認められる。

不明 1520の1個体が出土している。器種不明の小片であるが、全体的に丁寧につくられている。口縁部付近が大きく内済し、外側が断面蒲鉾形の突帯状をなしている。体部側は方形の透かし状をなし、透かし間の規模は3.30cmを測る。外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、内面口縁部付近は横方向のヘラミガキ、体部側は横方向のナデにより仕上げられている。

高坏 1189の1個体が出土している。坏部が皿状をなす高坏と考えられる。内面および外面は横ナデにより仕上げられているが、坏部外面は器表面の剥離のため調整を観察することは困難である。

(2) 須恵器

杯A・杯B蓋・杯B・榠・皿・蓋・壺・蓋・壺・平瓶・硯・鉢・獸脚が出土している。

杯A 1361～1377・1380～1391の29個体を図化している。aタイプ～gタイプ・iタイプ～mタイプが認められる。

aタイプは1361の1個体である。体部と底部の境外面は、弱い静止ヘラ削りが加えられている。

bタイプは1365と1388の2個体である。1365の底部外面の仕上げは粗雑である。

cタイプは1362の1個体である。

dタイプは1366・1369・1370・1372・1373・1381・1382・1385の8個体である。1370は硬質に焼き上げられている。

eタイプは1363と1364の2個体である。

fタイプは1367・1380・1384・1387の4個体である。1380の口縁部内外面には煤の付着が認められ、灯明器としての使用が考えられる。

gタイプは1371・1389・1391の3個体である。1389は全体的に雑なつくりで、細かい亀裂が多く認められる。また比重が軽い傾向にある。

iタイプは1383の1個体である。

jタイプは1374・1377・1390の3個体である。1390の体部と底部の境外面は、弱い静止ヘラ削りが加えられている。

kタイプは1368の1個体である。底部外面には墨書きが認められるが一部に限られ、全体は不明である。

lタイプは1376の1個体である。胎土が他に比べて砂質である。

mタイプは1375と1386の2個体である。

杯B蓋　杯B蓋Aと杯B蓋Bが出土している。

杯B蓋A 1392～1413の22個体で、aタイプ～cタイプの3タイプに細分できる。

aタイプは1393・1400・1403・1406～1408・1410の7個体である。1393は口径27.40cmを測る。天井部は回転ナデのみで仕上げられている。内面は使用による摩減痕が認められ、硯に転用されていた可能性も考えられる。1403の天井部内面は使用痕が顕著で、転用硯の可能性が考えられる。

1400の天井部はヘラ切り後回転ヘラ削りにより仕上げられている。1403は回転ヘラ削り後回転ナデに

より仕上げられている。1406・1407・1410の天井部は、ヘラ切り後回転ヘラ削りにより仕上げられている。つまみは、鉗状をなすもの(1407・1410)と、擬宝珠形に近いもの(1400・1406)が認められる。

bタイプは1392と1396の2個体である。1392は口径29.40cmを測る。天井部と口縁部の境は不明瞭である。天井部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。

cタイプは1394・1395・1397・1401・1402・1411の6個体である。天井部は、回転ヘラ削り後回転ナデにより仕上げられるもの(1394)、回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられるもの(1397・1401・1402・1411)、ヘラ切りのまま未調整のもの(1402)が認められる。つまみは、中央部がやや盛り上がるもの(1401)と、全体が盛り上がるもの(1411)が認められる。口縁端部は下方に屈折し、接地している。1395と1401は端部が内側に巻き込まれ、蘇手状をなしている。また1402の天井部内面は使用痕が顕著で、転用観の可能性が考えられる。

この他1398・1399・1404・1405・1412・1413については、全体の形状が不明なため詳細な分類は困難である。このなかで、天井部がヘラ切りのまま未調整のもの(1405)、ヘラ切り後ナデにより仕上げられるもの(1404)、回転ヘラ削り後回転ナデにより仕上げられるもの(1412)、回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられるもの(1398・1399・1413)が認められる。

杯B蓋B 1533～1537の5個体である。天井部外面は回転ヘラ削り、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。天井部は、回転ヘラ削り後ナデを加えるものも認められる(1533・1534・1536)。1536の天井部には別個体の釉着が認められる。

杯B aタイプと底部片が認められる。いずれも底部は回転ヘラ切りにより切り離され、ナデにより高台が貼り付けられている。

aタイプはa1～a13の各タイプが認められる。

a1は1446の1個体である。1446の体部外面はヘラナデ、底部はヘラ切り後ナデにより仕上げられ、ヘラ記号が認められる(写真図版136)。

a2は1414と1447の2個体である。1447の底部外面はヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

a3は1415～1419の5個体である。1415はヘラ切り後回転ヘラ削りが加えられている。1416と1417の高台内側には爪先痕が認められる。1418の底部には、2本のヘラ先によるヘラ記号が認められる。

a4は1436と1450の2個体である。1450の底部の仕上げにおいて、ヘラ切り後ナデが加えられている。1450は高台の貼り付けが粗雑で、体部には火ぶくれも認められる。

a5は1449と1469の2個体である。1449は全体的に粗雑な仕上げで、特に高台のつくりは断面形が一定していない。底部の調整において、ヘラ切り後にナデが加えられている。1469についても、底部のヘラ切り後にナデが加えられている。粗い胎土である。

a6は1438・1439・1470の3個体である。

a7は1460・1465・1466・1468・1471の5個体である。1471の底部内面には、ヘラ記号状のヘラ先の当たりが認められる。1465と1471は底部のヘラ切り後ナデが加えられている。

a8は1426・1429・1431・1433・1435・1437・1441の7個体である。1431はしまりの悪い胎土である。1433の底部外面には赤色顔料の付着が認められ、朱墨硯に転用された可能性が考えられる。

a9は1423と1432の2個体である。1423内面見込みには使用痕が認められる。

a10は1422・1424・1425・1427・1428・1430・1434の7個体である。

a11は1421の1個体である。

a12は1442の1個体である。1442の底部はヘラ切り後にナデが加えられている。

a13は1443の1個体である。1443はヘラ切り後に回転ナデにより仕上げられている。

底部片は1440・1444・1445の3個体を図化している。1444は体部下端外面が回転ヘラナデにより仕上げられ、底部外面は粘土紐痕が顕著である(写真図版135)。1445の外面は釉の付着が著しく、調整を観察することは困難である。

椀 椭A・椭B・椭C・椭Dが出土している。

椭A aタイプが出土している。aタイプは1378と1379の2個体である。2個体ともa2タイプに細分されるものである。1378はひきあげ痕が顕著である。

椭B 1448・1451～1464・1467・1826～1830の21個体を図化している。aタイプ～cタイプの各タイプが認められる。

aタイプはa1・a2・a3の3タイプが認められる。

a1タイプは1448・1451～1454の5個体である。1451は高台疊付に刻み目状の圧痕が認められる。1452の底部高台の内側には爪先痕が認められる。

a2タイプは1455～1459・1461・1467の7個体である。1457の底部には赤色顔料が認められ(巻首図版17)、蛍光X線分析によりベンガラとの分析結果が得られている(第5章第8節)。朱墨硯としての使用が考えられる。1459の高台は内端部が接地しており、その断面形状は一定していない。

a3タイプは1462～1464の3個体である。1462と1463の高台は粗雑なつくりで、底部の外縁部に貼り付けられている。

bタイプは1829の1個体である。1829は、底部を回転ヘラ切り後高台が貼り付けられている。ヘラ切り後には底部外面にナデが加えられている。また体部から口縁部内外面は回転ナデを基本としているが、体部外面下端高台付近は、高台貼り付け後横方向の静止ヘラ削りにより仕上げられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。

cタイプは1826～1828・1830の4個体である。1826と1827がc1タイプに、1828がc2タイプに分類される。1827は高台が底部から体部への変換部に貼り付けられているが、その貼り付けは雑である。また、底部外面は糸切り後ナデが加えられている。1828は底部が回転糸切り後高台が貼り付けられ、体部から口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられている。1830の高台は、高台高が1mm～2mmと低く、退化倾向が顕著である。

この他1472は椭Bの底部と考えられる。底部外面、高台の内側には爪先の当たりが認められる。

椭C 1473～1475の3個体を図化している。1474がaタイプに、1473と1475がbタイプに分類される。1473は体部と口縁部の境外面の後は明瞭であるが、1474と1475は不明瞭である。1475の体部と口縁部境には1条の沈線が引かれている。また1743と1474は、底部をヘラ切り後ナデが加えられている。

椭D aタイプ～cタイプの3タイプが認められる。ただし1831・1832・1836・1837については、椭Dと考えられるが底部まで残存せず、いずれのタイプに分類できるか不明である。

aタイプは1833～1835・1839～1841・1844～1848・1852・1853の13個体である。

bタイプは1838と1842の2個体である。椭Dは細分される。

cタイプは1843・1849・1851の3個体である。

この他1850は体部のみ残存する個体である。外面に墨書きが認められるが、その内容は不明である。

皿 皿A・皿C・皿Dが出土している。

皿A aタイプ～eタイプの各タイプが出土している。

aタイプは1481・1489・1498・1512・1514の5個体である。1489の内面は摩耗による使用痕が顕著である。1514の内面には赤色顔料の付着が認められ、蛍光X線分析によりベンガラとの分析結果が得られている(第5章第8節)。

bタイプは1494と1501の2個体である。1494の体部と底部境外面には回転ヘラナデが加えられている。

cタイプは、1476・1477・1479・1480・1482～1485・1490～1493・1495～1497・1499・1500・1502・1503・1505～1509・1511・1513の26個体である。1476の内面には赤色顔料の付着が認められる。1492の底部外面には、ヘラ記号状のヘラ先の当たりが認められる。1503と1513は粗い胎土である。また、1476・1477・1482・1485・1491・1493・1502・1508の底部は、ヘラ切りの後にナデは加えられていない。

dタイプは1478・1486～1488・1504・1510の6個体である。1486の内面には朱墨の付着が認められる。1488の底部は回転ナデにより仕上げられている。

eタイプは1515の1個体である。底部と口縁部の境は不明瞭である。底部はヘラ切りにより切り離され、ナデにより仕上げられている。

皿C 1855の1個体である。1855は、底部を回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。体部中位外面にはシャープな沈線が認められる。内面見込みは使用による摩耗が顕著である。墨痕は認められないが、硯に転用された可能性も考えられる。

皿D 1856の1個体が出土している。1856は底部が平高台をなす皿である。底部は回転糸切りにより切り離されている。

蓋 1518の1個体が出土している。平面方形をなす蓋と考えられ、そのコーナーの一部が残存している。ただし全体像は不明である。天井部から口縁部にかけては「く」字形に屈曲している。外面は横方向の静止ヘラ削り、内面は横方向のナデにより仕上げられている。端部はヘラナデにより仕上げられている。天井部外面には自然釉の付着が認められる。

壺蓋 1264～1269と1274の7個体を図化している。基本的形態は同じで、1274のように擬宝珠形のつまみが付くものと考えられる。内外面とも回転ナデを基本とし、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。1264・1266・1268・1269は、天井部が回転ヘラ削り後回転ナデにより仕上げられている。また1268は、天井部と口縁部境外面にも回転ヘラナデが施されている。

1274は口径6.90cmと小型で、小型壺の蓋である。完存する個体で、天井部には擬宝珠形のつまみが貼り付けられている。基本的な整形・調整は他の壺蓋と同様である。

壺 A・壺E・壺L・壺K・壺M・壺N・壺Q・底部が出土している。

壺A 1292の1個体が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

壺E 1308の1個体である。1308は硬質に焼き上げられ、その特徴から陶邑産の可能性が考えられる。

壺L 1279～1283・1288の6個体を図化した。内外面が回転ナデにより仕上げられている。口縁端部は①上方へ摘み上げるタイプ、②上下に拡張させるタイプが認められる。①は1279・1280・1282の3個体である。②は1281と1283の2個体である。1280は、焼成の特徴から陶邑産の可能性が考えられる。

壺K 1284・1285・1301の3個体が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。1284は、口縁部と頸部境に1条の沈線が描かれている。沈線は1周後重複が認められる。1285は2条の

沈線が認められるが、1284より幅の広い沈線である。

壺M 1275・1277・1278の3個体が出土している。1275は完形に復元された個体で、扁球形の体部に口縁部が短く直立している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、体部下半外面には回転ヘラ削りが施されている。底部はヘラ切り後高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。1277と1278は口縁部のみの残存のため、その形態から壺Mと判断したものである。

壺N 1286・1287・1866～1870の7個体を図化した。1286と1287は外面とも回転ナデにより仕上げられ、口縁端部は上下もしくは上方へ拡張させている。

1866～1870は双耳壺の肩部を中心とした壺Nである。1866は突帯を伴わないNaタイプである。ただし、わずかに沈線が3条横行している。最上位の沈線は太くしっかりしたもので、他は鋭利な沈線である。耳が残存するが、厚さ6mmの板状をなし、鋸形に切込みが入れられている。耳には径8mmの円形の透かしが開けられている。全体的に丁寧な仕上げである。1867～1870はNbタイプで、2条の突帯が貼り付けられている。突帯断面は、1867と1868が三角形、1869が台形をなす。1870は断面蒲鉾形の突帯2条が接して貼り付けられている。

壺Q 1293の1個体が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

この他1276は口縁部がわずかに受け口状をなしている。外面とも回転ナデにより仕上げられ、口縁部外面には上から7条と8条の波状文が加飾されている。1864は口縁端部に粘土が継ぎ足され、肥厚するとともに内面側に摘み上げられている。1865は受け口状をなす口縁部で、外面とも回転ナデにより仕上げられている。

底部 1294～1309・1871～1877の23個体を図化した。1295が壺B、1308が壺E、1297と1301が壺K、1305・1306・1309が壺L、1302が壺Q、1303と1304が水瓶、1874が小瓶の底部と考えられる。

平底をなす底部は1294～1300の7個体である。底部はヘラ切りによるもの(1294・1296～1298)と、ヘラ切り後ナデにより仕上げられるもの(1295・1299・1300)、ヘラ切り後回転ヘラ削りが施されるもの(1297)が認められる。また1295においては、回転ヘラ削りが施された範囲の上端部が強い回転ナデにより凹線状をなしている。1296については、焼き上がりの特徴から陶邑窯の可能性が考えられる。1299の底部内面については、指ナデにより仕上げられている。1300の底部内面もナデにより仕上げられ、胎土はかなり緻密で硬質に焼き上げられている。

輪高台をなす底部は1302～1309の8個体である。高台は貼り付けによるもので、底部のヘラ切り後に貼り付けられている。また1302と1304～1306は、底部も回転ナデにより仕上げられている。1303と1307は、ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。体部の調整は回転ナデを基本とするが、体部下端外面が回転ヘラ削りにより仕上げられるものも認められる。1302と1303がこれに該当する。

また1303は、回転ヘラ削りを施した上端部に1条の沈線が認められる。1307は高台が横方向に張り出し、下端部が接地している。底部から体部の変換部が屈曲傾向にあり、この外面には2条の沈線が認められる。1309は底径が3.70cmと小型の壺である。

以上その他、1871は回転糸切り後輪高台が貼り付けられている。1872・1873・1875～1877は底部が回転糸切りによる切り離しである。1873の底部にはヘラ記号が認められる。1874は小瓶の底部と考えられ、底部はナデにより仕上げられている。

平瓶 1289と1521～1525の6個体を図化している。1289は平瓶の口縁部と考えられ、外面とも回転ナデにより仕上げられている。1521は外面とも回転ナデにより仕上げられている。1522は回転ナデを基

本とするが、体部下半外面は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。肩部には把手の基部が残存している。1523と1524は口縁部のみの残存で、口縁部内外面が回転ナデ、体部内面がナデにより仕上げられている。1525は1522と同様の調整である。ただし底部は平底で高台は認められない。

硯 円面硯と風字硯が出土している。

円面硯 1526～1530の5個体が出土している。

1526は硯面と脚部上端を中心に残存する。硯面は縁側が外側に傾斜し、その下端に断面蒲鉾形の突帯を貼り付け、海部が形成されている。突帯上端と陸部の高さ同じで、海部の深さは6mmである。脚部との境にも断面蒲鉾形の突帯が貼り付けられている。脚部には方形傾向の透かしの一部が2方に残存するが、極一部に限られ、総数の復元は困難である。内外面ともナデを基本として仕上げられ、透かしはヘラ切りにより整えられている。陸部は使用痕が顕著である。硯面の裏面に赤色顔料の顯著な付着が認められ(巻首図版17)、蛍光X線分析の結果、ベンガラとの分析結果が得られている(第5章第8節)。朱墨硯としての転用が考えられる。

1527も硯面と脚上端部を中心に残存する。硯面外縁部に断面方形の突帯が貼り付けられ、突帯内側裾部が海部となっている。陸部は突帯上端より低く、海部との比高はわずか2mmである。脚部には方形の透かしが2方認められる。その間隔から、全体で12方に開けられていたものと考えられる。残存する透かしの幅は、1.50cm・1.10cmと一定していない。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、透かしはヘラにより開けられている。陸部には使用痕がわずかに認められる。

1528は硯面から脚部まで残存し、全体がわかる唯一の例である。緻密な胎土である。硯面外縁部が断面長方形の突帯をなし、その内側裾部が海部となっている。陸部までは残存しないが、少なくとも4mmの深さを確認することができる。脚部上端、硯面との境および脚端部付近の外面には断面蒲鉾形の突帯が各1条認められる。この突帯間が透かし帯となっている。透かしは方形で、ヘラにより開けられている。2方残存するが、各透かしの規模は不明である。透かし間の間隔は2.70cmを測る。この間隔から、全体で10方前後の透かしがあったものと考えられる。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

1529も硯面と脚上端部を中心に残存する。硯面をなす円盤上外縁部上面に断面長方形の突帯が、その下面に脚部が貼り付けられている。突帯上端と陸部がほぼ同じ高さとなっている。陸部から海部への傾斜は他の製品と比較して緩やかである。突帯内側裾部が海部となり、陸部との比高は9mmである。透かしは方形で、4箇所残存する。その幅は1.20cm～1.30cmで、全体で12方に開けられていたものと復元される。内外面とも回転ナデにより仕上げられているが、陸部内面のみナデにより仕上げられている。陸部の使用痕は顕著ではない。

1530も硯面と脚部上端を中心に残存する。硯面外縁から口縁部のがび、その内側裾部が海部となっている。陸部は残存しないが、陸部との境は溝状をなすものと考えられる。口縁部外面下端には2条の沈線が引かれ、その上側には8本を単位とする波状文が描かれている。透かしは長方形透かしが3箇所残存する。その幅は1cm、透かしの間隔は1.50cmを測り、全体で17箇所に開けられていたものと復元される。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

風字硯 1531の1個体が出土している。瓦質の製品で、海部側の一部が残存する。平面形は隅丸長方形をなすものと考えられ、周囲には幅1cm～1.50cmの外縁部が認められる。陸部との比高は8mmから1.20cmを測る。海部は外縁部内側に沿うもので、幅1cm、陸部との比高2mmを測る。上面がナデによる以外は、ヘラ削りもしくはヘラナデにより仕上げられている。陸部付近に使用痕が認められる。

鉢 鉢A・鉢D・捏鉢が出土している。

鉢A 1858～1860の3個体である。1858は、体部外面が回転ヘラ削り、他が内外面とも回転ナデにより仕上げられている。1859は内端部をつまむナデにより水平な端面をなし、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。1860については摩滅のため内外面の調整は観察できない。

鉢D 1270～1273・1290・1291・1863の7個体である。いずれも口縁部内外面および体部内面は回転ナデにより仕上げられている。大型のタイプは、体部外面は灰被りが著しく、調整を観察することは困難である。小型のタイプは体部最大径が肩部にあり、口縁部が短く斜方にのびている。1273の底部は、回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。

1863は体部が叩き整形、その後内外面とも回転ナデにより仕上げられている。体部下半は、外面が横方向のナデの後縦方向のヘラ削り、内面が横方向のナデにより仕上げられている。体部下端外面は横方向の静止ヘラ削りにより仕上げられている。最後に体部中位外面には1条の沈線が施されている。また口縁部外面にも2条の沈線が認められる。

捏鉢 1861と1862の2個体を図化している。2個体とも外端部を中心としたナデにより外傾する端面を有し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。その後体部内面がナデにより仕上げられている。1862は片口の一部が残存し、内面の使用痕も顯著である。

他 1857は回転ナデを基本とし、体部外面のみ回転ヘラ削りにより仕上げられている。

獸脚 1532の1点である。須恵質で、硯もしくは盤の脚と考えられる。指オサエとナデを基本に仕上げられ、つま先まで表現されている。接地面はヘラ削りにより仕上げられている。上端部は剥離面となっており、脚としては完存する。接地面からの高さは7.00cmを測り、接地面の長さは3.35cmである。また断面は径2.40cmの円形をなしている。

(3) 製塙土器

1612～1620の9点を図化した。いずれも器壁が薄いカップ形をなすタイプで、内外面が指オサエとナデにより仕上げられている。1618～1620は口縁端部が横ナデにより仕上げられ、粒子の粗い胎土が特徴的である。このなかで1613は全体的に丁寧な仕上げである。また1615は他の個体と比較して器壁が厚く、胎土の特徴が異なる。1617の内面は被熱により器表面が剥離している。

この他小片のため図化できなかったが、1921～1928の8点も出土している(写真図版169)。いずれも1612～1614・1616～1620と同タイプのものである。

(4) 黒色土器

1621～1637の17個体出土している。杯・椀・鉢の各器種が出土している。1624・1629・1630が内外面黒化されたB類にあたる以外は、内面のみ黒化されたA類である。内外面とも回転ナデの後、横方向を主体としたヘラミガキにより仕上げられている。

杯 1621～1626の6個体が出土している。

A類 1624を除く5個体である。底部がaタイプのものと、bタイプの両者が認められる。

aタイプは1621～1623の3個体である。底部は、1621と1623がヘラミガキにより仕上げられ、1622がヘラ切りにより切り離されている。

1621は口径22.80cmを測る大型の杯である。底部は平底をなし、大きく内湾する体部から口縁部が直

線的にのびている。底部から体部にかけては、弱い横方向のヘラ削りの後ヘラミガキが施されている。内面見込みには、ヘラミガキの後圓線状の暗文が施されている。1622は、基本的な形態は1621と同様であるが、口縁部がわずかに外反している。1622同様、体部下半が弱いヘラ削りにより仕上げられている。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。1623のヘラミガキは粗い仕上げである。

bタイプは1625の1個体である。1625は、口縁部内外面を挟み込むような回転ナデにより、内端部にわずかな稜が認められる。底部が回転ヘラ削りにより、体部から口縁部にかけての外面は回転ナデにより仕上げられ、ヘラミガキは認められない。体部下端外面にはヘラ削りが施されている。

この他1626については、底部まで残存しないため碗の可能性も否定できない。外面のヘラミガキは口縁部付近に限られるが、丁寧に施されている。

B類 1624の1個体である。1624は、底部が回転糸切り後ナデにより仕上げられている。体部下端はわずかにヘラ削りが施されている。内面見込みのヘラミガキは円を描くように施されている。

椀 1627~1636の10個体が出土している。1628と1630を除いては、内面のみヘラミガキが施されている。A類とB類が認められるが、B類は1629と1630の2個体に限られる。

A類 aタイプ・bタイプ・cタイプが認められる。

aタイプは1634~1636の3個体である。1634と1636は貼り付け輪高台で、ナデの後高台が貼り付けられている。1635も貼り付け輪高台であるが、回転ヘラ切り後ナデが加えられ、その後高台が貼り付けられている。高台はやや不安定で、その断面形は一定していない。

bタイプは1632と1633の2個体である。1632の底部はヘラ切りにより切り離されている(bl)。1633は回転糸切りにより切り離されている(b2)。

cタイプは1628の1個体である。1628は底部が明確な平高台をなし、回転糸切りにより切り離されている。内湾傾向にある体部に対して、口縁部はわずかに外反している。内外面とも回転ナデを基本とし、内面は全面に横方向のヘラミガキが施されている。見込み部についてはヘラミガキの後暗文が施されている。外面は口縁部付近にわずかにヘラミガキが認められる。

この他1627については口縁部の傾きから椀としたが、杯の可能性も否定できない。内面のみヘラミガキが施され、外面は回転ナデにより仕上げられている。1631は回転ナデにより仕上げられ、内面にはヘラミガキが施されている。

B類 1629と1630の2個体である。

1629の底部形態はcタイプに分類されるが、底部の調整は摩滅のため観察できない。1630は口縁部のみの残存で、内外面とも丁寧なヘラミガキにより光沢をなしている。

鉢 1637の1個体である。内面と外面の一部が黒化されているが、A類と考えられる。底部はヘラ切り後ナデが加えられ、その後高台が貼り付けられている。高台は、断面形が蒲鉾形をなし、その高さが2mmと退化傾向にある。体部は大きく内湾傾向にあり、口縁部が短く外反している。体部外面はナデと指オサエにより仕上げられ、口縁部内外面のみ横ナデにより仕上げられている。体部内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられ、見込み部は一定方向のヘラミガキが施されている。

(5) 緑釉陶器

椀・皿・壺の各器種が出土している。

椀 1638~1670の33個体を図化している。多くが小片で、良好なものは1638と1670に限られる。

1638は口縁部がbタイプに分類されるもので、硬陶である。底部を欠くが、その剥離痕から輪高台と判断できる。口縁部を中心内外面の一部が露胎し、輪花状の窪みが1箇所認められる。1670は口径7.40cmと小型の碗である。回転糸切りにより切り離され、底部を除いて施釉が認められる。硬陶である。

他の口縁部片としてはaタイプ・cタイプ・dタイプの3タイプ(第571図・第572図)が認められる。

aタイプ 1648の1個体で、口縁部内面には1条の浅い沈線が認められる。焼成は硬陶である。

cタイプ 1639・1640・1642・1643・1645・1647の6個体で、1640を除いて硬陶である。1643の内面には段がわずかに残存している。1645は器壁が薄く仕上げられ、口縁部内外面の一部が露胎している。

dタイプ 1641・1644・1646・1649・1650の5個体で、1641と1644を除いて硬陶である。1646の口縁端部には、指オサエによる輪花状の窪みがそれぞれ1箇所認められる。1649の体部内面には段が認められるとともに、この高さに対応する外面以下がヘラ削りにより仕上げられている。

底部片としては、底部1～底部5の各タイプ(第572図・第573図)が出土している。

底部1 1659・1663・1666の3個体で、いずれも硬陶である。1659は、体部下端外に沈線が1条、底部内面には重ね焼き痕が認められる。高台内面より内側は露胎している。1663は高台疊付けより内側が露胎している。1666は全面に施釉が認められる。

底部2 1652～1655・1657・1658・1661・1662・1665の9個体である。いずれも硬陶である。1652は高台疊付けから内側が露胎している。1653は底部と体部の境内面に1条の沈線が施され、全面に施釉が認められる。1654は高台全体が露胎している。1655は全面に施釉が認められ、内面は施釉前にヘラミガキが施されている。また1条の段に近い沈線が認められる。1657と1662は高台疊付けより内側が露胎している。1661は全面に施釉が認められる。1665は、高台の貼り付け痕は明確ではないが、接合部断面の状況から貼り付け高台と考えられる。高台内面が露胎している。

底部3 1651の1個体である。底部はヘラ切り後高台が貼り付けられ、高台疊付けから内側の一部が露胎している。

底部4 1656・1660・1667の3個体で、全て硬陶である。1660と1667は全面に施釉が認められる。

底部5 1664・1668・1669の3個体で、いずれも軟陶である。1664は底部が回転ヘラナデにより仕上げられ、全面に施釉が認められる。1668の底部は回転ヘラ切りにより切り離され、体部外は回転ヘラ削り後施釉されている。1668と1669は全面に施釉が認められる。

■ 1671～1695の25点図化している。良好な資料は1672・1676・1677の3個体である。

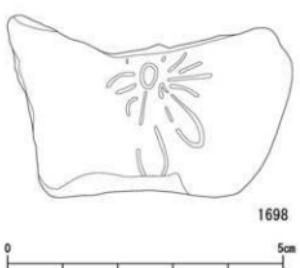
1672は、底部が高台側面を含めて回転ヘラ削りにより仕上げられていることから、蛇の目高台の可能性が高いものと考えられる。高台を除く全面に施釉が認められる。1676は高台内面より内側が露胎している。1677は底部を回転糸切り後高台が貼り付けられている。口縁端部には輪花が2箇所認められ、その位置関係から当初は4箇所にあったものと考えられる。全面に施釉が認められる。口縁部を中心に残存するものとしては、口縁部a・口縁部b・口縁部cの各タイプ(第574図・第575図)が認められる。

口縁部a 1674の1個体で、硬陶である。全面に施釉が認められる。

口縁部b 1673と1675の2個体で、いずれも硬陶である。1673は全面に施釉が認められる。1675は口縁部が大きく外反し、端部は露胎している。

口縁部c 1671の1個体で、硬陶である。1671は、内外面を横方向のヘラミガキの後施釉されている。全面に施釉が認められる。

底部を中心に残存するものとしては、底部1を除く各タイプ(第573図・第574図)が出土している。



第349図 1698陰刻花文実測図



第350図 1698陰刻花文

底部2 1678・1679・1681・1683の4個体で、いずれも硬陶である。1678・1679・1681は高台内面より内側が露胎している。1683は全面に施釉が認められる。

底部3 1680と1682の2個体である。1680はヘラ切り後に高台が貼り付けられている。釉の残存はわずかである。軟陶である。1682は、底部を回転糸切りにより切り離し後高台が貼り付けられ、高台内面より内側を除いて施釉されている。硬陶である。

底部4 1684～1687の4個体である。1685と1686が硬陶である。1685の内面は釉の付着により調整を観察することが困難である。4個体とも全面に施釉が認められる。

底部5 1688・1689・1691・1692・1694・1695の6個体で、1695を除いて軟陶である。1688は全面に施釉が認められる。1689は全体的に摩滅が著しく、調整を観察することは困難である。底部についても平高台と蛇の目高台の可能性が考えられるが、明確な絞別は困難である。底部を除いて施釉が認められる。1692は内外面とも摩滅傾向にあり、調整を観察することは困難である。全面に施釉が認められる。1694についても内外面とも調整を観察することは困難である。1695については、ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。底面は露胎し、ヘラ記号が認められる。1691と1694は全面に施釉が認められる。

底部6 1690と1693の2個体である。1690は底部が回転糸切りにより切り離されている。軟陶である。1693は底部が回転糸切りにより切り離され、底部外面を除いて施釉が認められる。硬陶である。

壺 1696～1698の3点を図化している。いずれも小型品で、全体を復元できたものは認められない。

1696は外面に施釉が認められるが、全体的に摩滅傾向にあり調整を観察することはできない。1697は、底部が回転糸切りにより切り離され、体部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底面を除いて施釉が認められる。1698は体部を中心に残存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面には陰刻花文が認められる(第349図・第350図)。陰刻は浅い刻みである。内外面に釉が掛けられている。

この他、小片のため図化できなかつたが、1886～1915が出土している(第38表 写真図版155・156)。1886～1913は碗の口縁部を中心とした小片である。1886～1900が硬陶、他が軟陶である。1914と1915は壺の体部片で、いずれも軟陶である。

(6) 灰釉陶器

1699～1710の12点が出土している。器種としては碗・皿・壺蓋・壺が出土している。

まず1699は碗の底部と考えられるが、内外面とも施釉が認められないため、灰釉と断定することはできない。非常に緻密な胎土に加え硬質な焼き上がりで、本遺跡出土の須恵器とは明らかに異なる。この

ため灰釉陶器の可能性を考え、本項で報告する。底部は輪高台をなすが、削り出しによるものと考えられる。体部外面は回転ヘラ削りの後横方向のヘラナデにより、体部内面は回転ナデにより仕上げられている。見込みは回転ナデの後、円を描くようなヘラミガキにより仕上げられている。またその中心部は一定方向のヘラナデにより仕上げられている。内外面とも極めて丁寧な仕上げである。

椀 1700～1702が該当する。内外面とも回転ナデを基本に仕上げられている。1700の体部下半外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。口縁端部を除く内面に斜方向の施釉が認められ、ハケヌリとみられる。1701は体部外面が露胎している。1702は全体が復元でき、外面全面に薄く灰釉が認められる。底部は回転ヘラ削り後高台が貼り付けられている。高台は高さが1cmと高く、端部を尖らせている。

皿 1703～1708の6個体を図化している。内外面とも回転ナデを基本に仕上げられている。1703は段皿で、内面に段の一部が残存する。口縁端部を除く内面のみ施釉が認められる。口縁部は外側からの抑えにより輪花状を呈している。1箇所の残存で、全体数の復元は困難である。内面下端には段が認められる。

1704～1708は底部を中心には残存し、高台より内側が露胎している。1704の高台は断面三日月形をなし、内面に施釉が認められる。1706の高台断面は三日月形をなしている。底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。1707の高台も断面三日月形をなし、回転ヘラ切り後に貼り付けられている。1708も回転ヘラ切り後に高台が貼り付けられている。1704～1707と比べて高台が低い傾向にある。体部外面は回転ヘラ削り後にナデにより仕上げられている。高台下面以外に施釉が認められる。

壺蓋 1709の1個体が出土している。完存し、口径が4.05cmと小型である。つまみは擬宝珠形をなし、口縁部は下方に屈曲している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、外面全面に施釉が認められる。

壺 1710の1個体が出土している。体部中位から口縁部にかけて残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。肩部に釉の付着が認められるが、当製品が灰釉であるかについては断定できない。

(7) 白 磁

碗が2個体(1878・1879)出土している。2個体ともIV類に分類される碗である。

(8) 青 磁

龍泉窯系の碗が3個体(1880～1882)出土している。1880は片切形の鍋をもたない蓮弁文が施文されている。1881は刻頭と蓮弁が一致しない蓮弁文である。1882は外面に草花文が施文されている。

(9) 瓦質土器

風炉と摺鉢が出土している。風炉は1883の1点が出土している。内面は剥離しており、調整等は観察できない。摺鉢は1884と1885に2点が出土している。内外面とも横ナデにより仕上げられ、内面には1884が9本、1885が10本を単位とするヘラ描きの鉢目が認められる。

(10) 丹 波 焼(写真図版175)

摺鉢が1点(2249)出土している。体部の小片で、内面にはヘラ描きの鉢目が認められる。

第10節 包含層出土土製品・石製品・金属製品

1. はじめに

本節では、包含層出土遺物のなかで、土製品・石製品・金属製品他について報告する。

2. 土 製 品

土馬と土鍤が出土している。

(1) 土 馬(図版66 写真図版169~172 附表88)

8点(1946~1953)出土している。

1946は頭部を中心に残存する。胎土中には1mm未満の砂粒が多く含まれている。指オサエ・ナデを中心的に整形され、眼・耳・鬚・面繫の表現が認められる。眼は両目が竹管文により表現されている。その規模は、 $5\text{ mm} \times 3\text{ mm}$ と $4\text{ mm} \times 3.5\text{ mm}$ である。耳は鬚先端部の両裾部が隆起により表現されている。右耳については剥離しており、剥離痕のみである。鬚は横断面を無花果形に整形され、表現されている。その高さは1.20cmである。面繫は浅いヘラ描きにより両側面に表現されている。口元は欠落しているが、その付近から後方へ伸びている。両側とも一本線ではなく、途中継ぎ目が各1箇所認められる。残存長6.00cm、最大幅2.55cm、高さ4.40cmを測る。

1947は胴部から尾部にかけて残存する飾り馬である。胎土中には1mm未満の砂粒が多く含まれている。指オサエ・ナデを中心に整形され、鞍と尻繫の表現が認められる。鞍は粘土の貼り付けにより立体的に表現され、後輪が完存し、前輪の一部が残存する。背からの高さは5mm、幅は2.40cmを測る。尻繫はヘラ描きによる細線で、背を中心に2本の線をクロスさせている。この他、後脚2本の剥離痕が認められる。尾についてはその先端が欠落しているが、先端を垂らす表現となっている。横断面は指円形をなし、残存長8.30cm、高さ4.35cm、最大幅2.40cmを測る。

1948も胴部から尾部にかけて残存する飾り馬である。胎土中には1mm未満の砂粒が多く含まれている。鞍と尻繫および尾の表現が認められる。鞍は後輪のみ残存し、粘土を貼り付け立体的に表現されている。その大きさは、高さ7.5mm、幅3.70cmを測る。鞍の後部、背上にはヘラにより尻繫が表現されている。表現法は1947と基本的には同じであるが、明らかに稚拙である。線が細くかつ浅く、たどたどしい引き方である。このため線の引き直しが認められる。尾は先端まで残存し、先端が丸くおさめられている。胴下面には後脚の痕が2箇所認められる。いずれも平面指円形ですり鉢状に窪んでおり、別途つくられていた脚が胴部に挿入されていたことが理解できる。その平面規模は $3.15\text{ cm} \times 1.80\text{ cm}$ を測り、窪みの深さは1.3cmである。残存長10.15cmを測り、横断面はほぼ円形に近く、高さは4.30cm、幅3.70cmである。

1949は尾部のみ残存する飾り馬である。尾の先端部を欠く。全体的に手づくねにより整形されている。横断面は扁平傾向にあり、両側面を中心へラによる尻繫が表現されている。残存長3.50cm、高さ4.25cmを測り、厚さは1.10cmである。

1950~1953は土馬の脚部である。断面円形をなし、下端部には接地面が認められる。このなかで、1950~1952においては蹄の表現もわずかに認められる。いずれも手づくね成形を基本としている。

1950は径3.10cmを測り、接地面からの高さは7.90cmである。上端部には挿入部が認められる。断面円形をなし、1948の四脚とは形態は一致しない。脚部の傾斜から前脚と考えられる。1951の断面は2.45

cm×2.15cmのほぼ円形をなしている。接地面からの高さは5.65cm残存する。脚部の傾斜から後脚と考えられる。1952は断面2.20cmの円形をなす。接地面からの残存高は5.30cmである。脚部の傾斜から前脚と考えられる。全体的に縦方向のヘラナデにより仕上げられている。1953は径3.30cm×3.00cmの断面円形をなしている。接地面からの高さは9.95cm残存する。脚部の傾斜から前脚と考えられる。

(2) 土 錘(図版66~68 写真図版173・174 附表98・99)

1955~2021の67点を図化している。いずれも管状土錘に分類されるものである。平面形は紡錘形をなし、ナデもしくは指オサエにより仕上げられている。

このなかで、1957・1959・1961・1962・1965・1971・1974・1977・1983・1984・1994・1996・2000は両端がヘラナデにより仕上げられている。

1958は一部ヘラにより削られた痕が認められる。1965は手づくね成形後、板状工具によりナデが加えられ、木目状の筋が顯著に認められる。1971は手づくね成形後棒状工具による圧痕が認められる。斜方向と水平方向の2方向が認められる。一部に縄目も認められる。1982は全体的に形状が整えられていない。1983についても指オサエ痕が顯著で、整えられた形状とはなっていない。1992は板目状の圧痕が認められる。2007は全体的にナデにより丁寧に仕上げられている。

なお2003と2012は摩滅が著しく、詳細な調整は観察できない。

3. 石 製 品(図版77~88 写真図版187~201 附表100・101)

敲石・磨石・石皿・台石・砥石・石斧・石剣・子持勾玉・石臼が出土している。

(1) 敲 石

S 15~S 29の15点出土している。

S 15はやや扁平傾向にある円礫で、数か所に敲打痕が認められる。S 16はやや紡錘形をなす円礫で、その先端部を中心に敲打痕が認められる。S 17とS 18も卵形をなす円礫で、その先端部に敲打痕が多く認められる。S 19は小型のやや扁平傾向にある円礫で、先端部を中心に敲打痕が認められる。

S 20はやや亜角礫傾向にある円礫で、数か所に敲打痕が認められる。S 21は長楕円形傾向にある円礫で、ほぼ全面に敲打痕が認められる。S 22は棒状をなす円礫で、その先端部を中心に敲打痕が認められる。S 23はやや扁平傾向にある円礫で、数か所に敲打痕が認められる。S 24とS 28はほぼ球形をなす円礫である。1箇所に集中して敲打痕が認められる。S 25は平坦面を有する円礫である。平坦面を中心に摩耗痕が認められるとともに、平坦面を除く箇所に敲打痕が認められる。

S 26は敲石と砥石として使用された製品である。断面方形に近い棒状の円礫で、その両側先端に敲打痕が認められる。敲打痕はかなり顯著で、頻度の高い使用が考えられる。さらに側面を中心に擦痕が認められ、砥石としての使用も考えられる。

S 27とS 29は、敲石および磨石として使用された製品である。S 27は卵形をなす円礫で、その先端部に敲打痕が認められる。敲打痕の一部に磨き痕が認められる。S 29はやや扁平傾向にある円礫で、側面の一部に敲打痕と磨き痕が認められる。

(2) 磨 石

S 30~S 42・S 44・S 45の15点が出土している。

S30はやや扁平傾向にある円窪で、表裏両面に磨り面が認められる。S31は球形に近い円窪で、全面にわたり磨き痕が認められる。S32はやや扁平傾向にある卵形の円窪で、表裏両面を中心磨き痕が認められる。

S33とS34は表裏両面が扁平傾向にある円窪である。扁平傾向にある一面に磨き痕が認められる。

S35は球形をなす円窪で、一部に磨き痕が認められる。S36は球形に近い円窪で、一部に磨き痕が認められる。S37・S39・S40は一部扁平な面を有する円窪で、この扁平な箇所が使用痕となっている。S41も扁平傾向にある円窪で、一方の平坦面全面に摩滅痕が認められる。S42も同様の円窪で、側面の一部に磨き痕が認められる。

S38は全体的に扁平な円窪で、全面に使用痕が認められる。特に平坦部の使用痕が顕著である。

S44は梢円形をなす扁平傾向にある大型の円窪である。扁平な面一面に磨き痕が認められる。S45は断面梢円形をなす円窪である。側面全面に磨き痕が認められる。

(3) 石 盆

S46～S48の3点出土している。

S46は大型の製品であるが、一部を欠く。極端に扁平な円窪で、上面に凹部が顕著に認められる。S47は、S46と比較すると小型で扁平な円窪である。全面に擦り痕が認められるが、扁平をなす一面が特に顕著に使用されている。S48は扁平な円窪である。平坦をなす一面の一部に窪みが認められる。

(4) 台 石

S50の1点出土している。

S50は一部扁平気味の円窪である。全面に使用による磨滅痕が認められるとともに、扁平をなす一面が使用により顕著な窪みとなっている。

(5) 砥 石

S52・S54～S61の9点出土している。

S52は断面方形傾向にある円窪である。2面にわたり砥ぎ面が認められる。S54は円錐状をなす円窪で、砥ぎ面が1面認められる。S55は断面方形をなす窪で、4面すべてが砥ぎ面として使用されている。各面とも擦痕が顕著に認められる。S56は断面紡錘形をなし、長さ30cmと大型で扁平な円窪である。上下両面と1側面に砥ぎ面が認められる。特に側面の使用痕が顕著である。S57は一部の残存であるが、比較的小型の円窪である。上下2面に砥ぎ面が認められる。S58は欠損部が多いが、断面方形傾向にある円窪である。残存する3面に砥ぎ痕が認められる。S59は断面長方形をなす棒状の窪である。上面と側面の2面に砥ぎ痕が認められる。S60は断面方形傾向にある棒状の製品である。各4面に砥ぎ痕が認められる。S61は断面方形をなすが、一部の残存にとどまり全体は不明である。3面で砥ぎ痕が認められる。

(6) 石 斧

S62の1点である。大型始刃石斧と考えられ、刃部を中心に残存する。刃部は断面三角形をなす両刃で、使用痕が認められる。側面には加工痕が認められる。

(7) 石 剣

S63の1点で、一部が残存する。断面菱形をなし中央部に鏑が認められることから、石劍と判断したものである。ただし残存する端部が切先状をなさないことから、他に転用された可能性が考えられる。全面に磨痕が認められる。

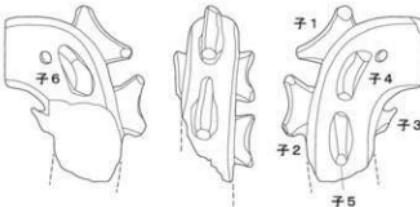
(8) 子持勾玉

S64の1個体が出土している。蛇紋岩製の製品で、尾部を欠き、全体の約2/3が残存する。側面形は、C字形というより鉈形に近いものと考えられる。頭部は人為的にカットされている。本体の残存長は4.65cmを測り、頭部付近の断面は2.16cm×1.54cmの隅丸長方形をなす。頭部付近には紐穴が貫通している。その径は3

mm～3.5mmを測り、両側から穿孔されている。ただし片側は割れ円錐状をなしている。全面に削り痕が認められる。

子勾玉は、背部に2個(頭部側から子1・子2)、腹部に1個(子3)、側面に2個(子4・子5)と1個(子6)認められ(第351図)、いずれも削り出されている。本体の残存状況から判断して、本来は背部に4個、腹部に2個、側面には3個の子勾玉があったものと考えられる。

子1は完存し、全長1.94cm、幅5.7mm、尾までの高さ8.5mmを測る。断面は扁平傾向にある。子2は尾の一部を欠く。残存長1.66cm、幅5.4mm、頭部までの高さ9.3mmを測る。横断面は扁平傾向にある。子3は基部の一部がわずかに残存する。残存長は9.0mm、残存高は4.5mmである。子4は完存し、全長1.46cm、幅5.3mm、高さ5mmを測る。横断面は扁平傾向にある。子5も完存し、全長1.41cm、幅5.8mm、高さ5.5mmを測る。横断面は扁平傾向にある。子6は基部を中心に残存する。残存長1.49cm、幅6mm、残存高3.5mmを測る。



第351図 子持勾玉の名称

(9) 石 白

S65の1点である。全体の1/4の残存にとどまる。復元される外径は56.52cmで、厚さは10.90cmである。1画が9本・10本の溝からなり、2画分残存する。全体としては8区画あったものと復元される。中央部には軸穴の一部が認められ、その径は2.20cmと復元される。また、側面には挽木の差し込み穴が認められ、その径は1.70cm、穴の深さは2.65cmである。

4. 金属製品(図版69~72・116 写真図版177~183 附表102~104)

銅製品と鉄製品が出土している。

(1) 銅 製 品

錢貨・鈎帶・風鈴が出土している。

錢貨は寛永通宝が1点(M7)出土している。遺存状況は良好とは言い難く、かろうじて銭文が読める程度である。

銅製の鈎帶(遙方)が1点(M8)出土している。厚さ1.5mmの銅板を基本としている。長方形板の周囲4辺が8.5mm~9mmの高さに縁取りされている。平面の規模は4.10cm×3.80cmとはば方形をなしている。下端部には垂孔が認められ、その規模は3.00cm×3.7mmを測る。裏面には、裏金具が四隅と各短辺中央の計6穴認められる。いずれも先端が欠けており、径1mm以下と小規模である。

風鈴(M63)は完存する個体である。半球形をなすが、正円形とはなっていない。径は5.60cmから5.70cmを測り、高さは2.80cmである。頂部に径4mmと5mmの紐穴が開けられているが、中心部からわずかにずれている。この他、紐穴以外に2箇所欠損部が認められるが、この起因・目的は不明である。

(2) 鉄 製 品

刀子・鎌・鉄賺・鉄釘・飾り金具・苧引金・火打金・石突・馬具・用途不明品が出土している。

刀 子 M9~M17の9点出土している。

M9は刃部から茎にかけて残存する。刃部は4.80cm残存し、刃幅2.10cm、背幅は5mmを測る。刃部と茎の境は両開となっており、その幅は2.35cmである。茎は5.10cm残存し、断面は12mm×4mmの長方形をなしている。

M10は完存し、全長11.30cmを測る。刃部は長さ6.50cmを測り、断面は鋭角な三角形をなしている。背幅は7mmを測り、刃幅は関部で最大で1.80cmである。茎との境は斜行する片開からなる。茎は全長4.80cmを測り、端部は先細りとなっている。断面は長方形をなし、その規模は関部付近で9mm×7.5mmを測る。一部に本質の遺存が認められる。

M11は刃部のみ残存し、残存長は5.65cmである。横断面は鋭角な三角形をなし、背幅は茎側で7.5mm、刃先側で4.5mmを測る。刃幅は最大で1.40cmである。

M12は刃部のみ残存し、残存長は5.30cmである。最大幅は1.30cmを測り、背幅は2.50mmである。

M13は刃部の先端部付近を欠く。残存長は9.40cmである。刃部は3.90cm残存し、関部付近の幅は1.25cmである。背幅は4.5mmである。茎との境は背側が直角な片開となっている。茎は完存し、5.50cmを測る。横断面は9.5mm×4.5mmの長方形となっている。

M14は刃部のみ残存し、残存長は5.35cmである。最大幅は1.10cmを測り、背部幅は4mmである。

M15は刃部の先端と茎を欠く。残存長は5.60cmである。刃部は4.50cm残存し、関部付近の幅は1.80cmである。背部幅は4.5mmである。茎との境は斜行する両開となっている。茎は1.10cm残存している。

M16は残存長6.65cmを測る。鹿角装の刀子である。茎と刃部の一部が残存する。茎はほぼ完存し4.90cmを測る。断面は3.5mm×5.5mmの長方形をなす。表面が鹿角に覆われ、1/2以上が残存している。刃部は1.75cm残存し、胸幅3.5mmを測る。関部は直角な均等両開で、幅5mmを測る。

M17は茎を中心に残存する。鹿角の遺存から刀子と判断したものである。残存長は6.60cmを測り、横断面は3mm×9.5mmの長方形をなしている。刃部側は横断面が三角形傾向にあり、関部に近いものと考

えられる。

鉈 M18の1点が出土している。刃部のみの残存で、切先も欠く。残存長は4.55cmである。横断面は片丸造で、断面三角形をなす。明確な稜線が認められたことから、鉈と判断したものである。

鉄 鐵 M19・M20・M22・M23の4点が出土している。

M19は長頭式の鉄鐵である。茎先端を欠く。身は柳葉形をなし、その長さは1.00cm、幅は6mmを測る。身と茎との境は1mmほど狭まり、闊をなしている。茎は5mm×6mmの断面方形をなしている。木質の残存は認められない。

M20は鎌身部が方形をなす方形鐵である。鎌身部は完存し、茎が一部残存する。鎌身部は切先のはうが広い逆台形をなし、切先部で2.85cm、関部で1.85cmを測る。鎌身部の全長は5.50cmを測り、厚さは3.5mmである。茎は3mm残存し、その断面は一辺3.5mmの方形をなす。

M22は有頭式の鉄鐵と考えられ、頭部と茎が残存する。両端を欠き、残存長は6.80cmである。頭部は5.80cm残存し、断面は6mm×4.5mmの長方形をなしている。茎との境は韓闊をなし、その幅は9mmである。茎は1.00cm残存し、断面は5mm×4.5mmの長方形をなしている。木質の遺存は認められない。

M23は鎌身と茎の一部が残存し、残存長は10.00cmである。鎌身は方頭形をなし、全長8.60cmを測る。関部では断面1.20cm×7mmの長方形をなすが、先端部は厚さ2mmとなっている。また幅も鎌身中央部より幅が広がり、先端部幅が1.20cmとなっている。関部で幅が両側とも1.5mm幅が狭くなり、茎の幅は9mmとなっている。茎の断面は8.5mm×6mmの長方形をなしている。茎は1.40cm残存する。

鉄 釘 M24～M34・M36・M38・M40～M44・M46・M48の20点出土している。いずれも断面方形をなす和釘である。頭部まで残存するものについては、多くが頭巻タイプの釘である。M24はほぼ完存する釘で、残存長は9.50cmを測る。頭部は折れ釘に近い形態である。M46についても折れ釘の可能性が考えられる。

飾り金具 M50～M54の5点出土している。

M50は幅2.60cm・厚さ2mmの帯状をなす鉄製品である。短辺は一端を欠く。残存する短辺には左右対称の各2段の抉りが施されている。またこの短辺付近には径5mmの穴が開けられている。工具等により開けられたものと考えられ、裏面にはその際の盛り上がりが認められる。

M51は幅2.05cmの帯状の製品である。両端を欠き、残存長は5.10cmである。厚さは2.4mmを測る。

M52は厚さ3mmの板状の製品である。一端を欠き全体の形状は不明である。幅2.55cmの板を基本形態とする。完存する一端は、一辺の中央部が三角形に7mm突出している。他端については幅が狭まっていく。

M53は3.55cm×3.20cmのほぼ方形をなす板状の製品である。四辺とも直線性に欠けている。ほぼ中央部に9mm×7mmのやや梢円形傾向の穴が開けられている。飾り金具の一種と考えられる。

M54は四葉座金具で2.35×2.30mを測る。中央部には4.5mm×6.5mmの穴が開けられている。また、各辺の中央部には幅4mm、深さ2mmのV字状の切込みが認められる。

苧引金 M55の1点である。一見したところ錐形の火打金と考えられるが、打撃部の厚みが薄く刃状を呈することから、苧引金と判断したものである。残存長4.15cmを測り、刃部の厚さは3mmである。

火打金 M56の1点が出土している。山形に分類されるタイプであるが、残存するのは全体の2/3に限られる。全体的に小型の製品で、紐穴は認められない。

石 突 M60の1点が出土している。完存する個体で、全長5.70cmを測る。全体的に円錐形をなし、横

断面は円形をなしている。最大径で1.05cmを測る。内部に木質は認められない。

馬具 M61の轡引手金具が出土している。完存する個体で、全長8.25cmを測る。引手先環は1.70cm×1.70cmを測り、内径は7.5mm×7mmである。引手壺は鉄軸に対してほぼ直角をなし、平面形は長楕円形をなす。その規模は、外径で4.45cm×2.10cmを測る。環断面は9.5mm×4mmの長方形をなしている。鉄軸は断面長方形をなし、その規模は9.5mm×5.5mmを測る。引手壺面に対してわずかに斜行している。

用途不明品 17点出土している。

M47は断面8mm×4mmの長方形をなすものである。完存する製品で全長4.50cmを測る。

M49は針状の鉄製品で、2.80cm残存する。断面は一辺2mmの方形をなす。約1/2の範囲に木質の残存が認められるが、本目と斜行している。鉄釘の可能性も考えられるが、細いことから針状製品として報告する。

M57は完存する製品である。吊手状をなす製品で、下端を鉤形に巻き込み環状をなしている。先端部が本体に接しており、紐状のものを引っ掛けすることは困難である。全長14.30cmを測り、断面は1.50cm×1.05cmの長方形をなしている。下端部ほど厚さが減じている。

M58は先端をわずかに丸くがほぼ完存する個体である。下端部付近の断面は6mm×4mmの長方形をなしているが、上端部ほど厚みを減じ幅が広くなっている。

M59は鉄製紡錘車の軸の可能性が考えられる製品である。ただし、X線透過写真において振じりを確認することはできなかった(第352図)。残存長11.40cmを測り、断面形は3.5mm×5mmの円形傾向にある。

M62は不明の製品である。幅1.15cm、厚さ3.5mmの板状の一端が直角に折り曲げられている。両端を欠くため全体の形状は不明である。残存長は8.40cmを測り、折り曲げられた長さは2.05cmである。

M64～M70は板状をなすものである。いずれも部分的な残存で用途は不明である。このため、図版71・図版72掲載の図の天地は確かなものではない。M65は残存長6.75cmと比較的大型で、わずかに内湾傾向にある。M66は縁辺部がやや厚みを持っている。縁辺部の厚さは4.50mmである。M70は縁辺部が蒲鉾形に1mmほど盛り上がりしている。

M71とM72については、薄い鉄板を折り曲げたものである。時期的に新しい可能性も十分考えられる。M73は薄い鉄片である。時期的に新しい可能性も十分考えられる。M74は棒状の製品である。断面4mmの隅丸方形をなし、中央部は空洞となっている。両端を欠き残存長は3.55cmである。

5. その他の(図版68)

瓦とふいご羽口が出土している。

瓦は、丸瓦が2点(2022・2250)出土している。2022と2250は玉縁式の丸瓦で、凸面は横方向のナデにより仕上げられている。凹面には布目が顕著に認められる。端面はヘラにより仕上げられている。

ふいご羽口は2点(2023・2024)図化している。いずれも一部のみ残存である。2023は最大径7.70cmを測り、通風部は型作りによりその径は2.20cmである。2024は一方の端部を中心に残存する。端部は断面三角形をなしている。復元される最大径は7.80cm、通風部の径は3cmである。図化した以外にも数点そ の小片が出土している(写真図版176)。



第352図
M59X線透過写真

第11節 小 結

1. はじめに

本章において南構遺跡の調査で明らかとなった点について報告してきた。ここでは、検出遺構・遺物についての概要をまとめておきたい。時期等の詳細については、第6章・第7章で検討することとする。

2. 検出遺構について

検出した遺構は、竪穴建物・掘立柱建物跡・柱穴・木棺墓・土壙・溝状遺構である。

竪穴建物については計21棟検出している。検出されたのは南地区の南半に限られ、後述(第4章)する南構古墳群が検出された地区とは平面的に重複が認められない。検出された竪穴建物は、いずれも平面方形をなすものである。竪穴建物の時期は、弥生時代後期～古墳時代前期(南構II期・III期)・古墳時代中期～後期(南構IV期～VI期)の大きく2時期からなる。

掘立柱建物については、計143棟復元されている。北地区から南地区にかけて、9次におよぶ調査地のほぼ全城にわたり検出されている。平面的に重複する建物が多く認められ、数時期にかけて建てられた結果と考えられる。具体的には、南構III期の1棟(SB129)を除いて、古墳時代から中世(南構VI期～IX期)に位置付けられる。

ここで柱穴とすることは、上記掘立柱建物として復元できなかったものである。柱穴についても、掘立柱建物同様、北地区から南地区のほぼ全城で検出されている。

木棺墓は4基検出されている。全て北地区に限られる。SX04のみから土器が出土しており、この土器から4基とも弥生時代後期(南構II期)の遺構と考えている。

このほか、土壙と溝については数的に限られている。特に溝についてはいずれも小規模なもので、その性格を明らかにすることは困難である。

上記の他、直接遺構には伴わないが良好な状態で出土した遺物を、地点名(「No○地点」)をつけて報告している。計81地点に及ぶ。多くは、本来遺構に伴っていたものと考えられる遺物である。これらについては、土壙層(黒ボク層)を深く掘り下げて遺構を検出した結果(第3章第1節)、比較的浅い遺構の中にあった遺物と考えられるものである。

3. 出土遺物について

南構遺跡の調査では多量の遺物が出土している。竪穴建物や柱穴・土壙内から出土した遺物も少なからず出土しているが、包含層からより多く出土している。これらの遺物は、本来は遺構に伴うものであったと考えられるが、先述したように土壙層(黒ボク層)を掘り下げた際の深度の浅い遺構に伴う土器と考えられる。出土した地点は、北地区から南地区にかけての広範囲に及んでいる。

出土した遺物は、縄文時代から中世まで及んでいる。具体的には、縄文時代・弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の各時代である。

縄文土器については遺構に伴うものは認められないが、早期を中心に多くの土器片が出土している。本来は遺構に伴っていたものと考えられる。また石皿・磨石等についても、当該期の石器と考えられる。

弥生時代については、後期の土器が出土している。竪穴建物に伴うものも含まれている。北近畿式の

特徴を有する土器である。この他、当該期の石器として大型蛤刃石斧や石劍の一部も出土している。

古墳時代に関しては、大きく前期と中期～後期の2時期に分けることができる。前期はいわゆる布留式の土器が出土している。後者については須恵器と土師器が多量に出土している。量的に本書で報告する土器の大半を占めている。堅穴建物等の遺構以外からも多量に出土している。

このほか、鉄軒や刀子・馬具等の金属製品や子持勾玉についても当該期の遺物と考えられる。特に、須恵器や金属製品に一部については、後述する南構古墳群に伴う遺物の可能性も含まれているものと考えている。これらの遺物については改めて報告する予定である(第6章)。また、石製品のなかで、砥石についても一部は当該期のものと考えられる。

飛鳥時代に関しては須恵器と土師器が出土している。多くは、前項の古墳時代後期の土器と時期的に連続するものである。

奈良時代から平安時代に関しては、須恵器・土師器の他、綠釉陶器や灰釉陶器・黒色土器が出土している。綠釉陶器については、多くの小片とともに完形に近いものも数点出土しており、当該期の南構遺跡の性格を考える上で重要な位置を占めるものと考えられる。この他、和同開珎・銚帶(巡方)・土製権・土馬についても当該期の遺物と考えられる。

鎌倉時代に関しては白磁碗・須恵器碗などが該当するが、量的にわずかである。

以上の他土錘が多く出土している。時期の特定は困難であるが、奈良時代から平安時代の可能性が高いものと考えている。

4. 小 結

調査の結果、南構遺跡は縄文時代早期に始まり、以後弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期～終末期・古代～中世と断続的に営まれた集落跡であることが明らかとなった。

検出遺構・出土遺物から判断して、古墳時代後期～終末期(南構V期・VI期)と奈良時代～平安時代が最も中心的な時期と考えられる。古墳時代後期～終末期については、後述する南構古墳群と平行する時期であり、同時期の集落と埋葬地が近接して明らかとなつたことになる。この両者の関係については章を改めて検討したい(第8章第1節)。

奈良時代～平安時代(南構Ⅶ～2期～Ⅸ～2期)については第1章でも報告したが、南構遺跡の南東に所在する但馬国分寺・第2次但馬国府との関連で注目される。両者の関係についても章を改めて検討したい(第8章第2節)。

兵庫県文化財調査報告 第525冊

豊岡市

南構遺跡・南構古墳群

-一般国道483号北近畿豊岡自動車道日高豊岡南道路事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

令和5(2023)年3月10日 発行

編 集： 公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発 行： 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷： 船場印刷株式会社
〒670-0994 兵庫県姫路市定元町4-2
